大分県文化財調査報告書第104集

古国府遺跡群

—国道210号羽屋工区道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

上芦原地区

土毛地区

甲斐本地区

1999

大分県教育委員会

古　国　府　遺　跡　群

—国道210号羽屋工区道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

上芦原地区

土 毛 地 区

甲斐本地区

巻頭図版

土毛ＡＩ区弥生時代人足跡

ここでは、左側の沼地で遊んだような足跡が多数検出された。足跡は、幼児、子供、大人、老人などのものがある。
この中には、外反拇趾の老人も認められ、沼地にいる魚などを家族総出で捕っていたのであろう。弥生時代には稲作りとともにこのような縄文時代からの伝統的な小規模漁労にも家族全員の共同作業が認められるのである。

（別府大学　坂田邦洋助教授のコメントより）

表紙・裏表紙・巻頭図版は長谷川正美の撮影による。

序

大分県教育委員会は、国道210号羽屋工区道路改良工事に伴う大分市古国府遺跡群の発掘調査を平成６年度から９年度までの間に実施しました。

古国府遺跡群は古代の豊後国府推定地の一つであり、大分平野最大の条里地割が残っているところであります。近年、この地域の羽屋・井戸遺跡において官衙的な性格を持つ遺構が発見されて注目を集めています。

今回の調査では、古墳時代の祭祀儀礼に使われた滑石製の子持勾玉が出土しました。これは大分県下で唯一のものであり、奈良時代以前の古国府地域の歴史を知るうえで貴重な資料となります。

本書が先人の営みの足跡を知り、将来守り伝えるべき文化財資料として多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後にこの調査について多大な御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝の意を表します。

平成11年３月31日

大分県教育委員会教育長
田　中　恒　治

例　　言

1．本書は、国道210号羽屋工区道路改良事業に伴い平成６年度から９年度に調査を行った大分市大字羽屋字上芦原・土毛・甲斐本地区の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、大分県土木建築部の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
3．本書の執筆者は次のとおりである。

第１章　はじめに
　　１．調査に至る経過……江田　豊
　　２．遺跡の位置と環境……村上久和
第２章　各地区の調査
　　１．上芦原地区……江田　豊
　　２．土毛地区……村上久和
　　３．甲斐本地区……吉田博嗣
第３章　まとめ
　　１．遺跡の性格について……吉田．江田．村上
　　２．今後の課題……村上
付論　大分市羽屋周辺のプラント・オパールについて……佐々木章

4．遺構・遺物の整理・復元・実測・写真などは、大分県文化課資料室で行い、遺物などの保管も同室で行っている。なお、土器、石器の観察表の色調については『新版標準土色帳』を使用した。
5．大分市羽屋周辺のプラント・オパールについては大分短期大学佐々木章氏の玉稿をいただいた。
6．本書の編集は各担当者で協議し、主として村上が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに……1
　　１．調査に至る経過……1
　　２．調査組織……1
　　３．遺跡の位置と環境……2
第２章　各地区の調査……5
　　１．上芦原地区……5
　　２．土毛地区……9
　　３．甲斐本地区……15
第３章　まとめ……26
　　１．遺跡の性格について……26
　　２．今後の課題……26
付論　大分市羽屋周辺の水田開始時期　－国道210号改修に伴う発掘調査区土壌のプラント・オパール分析から－　‥28

挿　図　目　次

第１図　大分平野における古墳時代及び古代の遺跡分布図（1／50000）……３～４
第２図　古国府遺跡群上芦原地区調査区位置図（1／2000）……5
第３図　上芦原地区基本土層図……6
第４図　上芦原地区遺構配置図……6
第５図　不整形土坑実測図……7
第６図　溝１平面・断面・土層実測図……7
第７図　上芦原地区出土遺物実測図……8
第８図　溝１周辺土層図……10

第９図　溝２周辺土層図……10
第10図　古国府遺跡群土毛地区調査区位置図……10
第11図　土毛Ａ区調査地点遺構図……11
第12図　土毛ＡⅡ区遺構平・断面図……11
第13図　土毛Ｂ区遺構平・断面図……12
第14図　土毛地区出土石器実測図……12
第15図　土毛地区出土土器実測図……13
第16図　甲斐本地区調査区位置図……15
第17図　甲斐本Ａ区遺構配置・土層図……16
第18図　甲斐本Ａ区出土滑石製子持勾玉実測図……16
第19図　甲斐本Ａ区出土遺物実測図１……17
第20図　甲斐本Ａ区出土遺物実測図２……18
第21図　甲斐本ＢⅠ・Ⅱ区遺構配置図……19
第22図　甲斐本Ｂ区２号土坑平・断面実測図……19
第23図　甲斐本Ｂ区出土鏡片実測図……19
第24図　甲斐本Ｂ区１号掘立柱建物跡実測図……19
第25図　甲斐本Ｂ区２号土坑出土遺物実測図……20
第26図　甲斐本Ａ・Ｂ区出土遺物実測図……20
第27図　甲斐本ＢⅢ区・Ｃ区遺構配置図……21
第28図　甲斐本Ｃ区１号掘立柱建物跡実測図……21
第29図　甲斐本Ｅ区遺構配置図……21
第30図　甲斐本Ｅ・Ｆ区出土遺物実測図……23
第31図　甲斐本Ｆ区平面図・溝１土層図……23
第32図　甲斐本Ｆ区出土土人形実測図……23
第33図　羽屋・井戸遺跡遺構配置図……26
第34図　羽屋・園遺跡遺構配置図……26
第35図　プラント・オパール定量分析手順……28
第36図　各検出地点のプラント・オパール密度から推定した植物量……30
第37図　プラント・オパール分析試料採集地点位置図……31
付　図　古国府条里字名及び条里内における発掘調査地点位置図

表　目　次

第１表　遺跡名一覧表……2
第２表　上芦原地区出土遺物観察表……9
第３表　土毛地区出土石器観察表……12
第４表　土毛地区出土土器観察表……14
第５表　甲斐本地区出土土器観察表（１）……24
第６表　甲斐本地区出土土器観測表（２）……25
第７表　植物体中の珪化機動細胞密度……28

写真図版目次

巻頭図版　古国府遺跡群土毛地区弥生時代人足跡検出状況
図版１　上芦原地区
図版２　上芦原地区
図版３　土毛地区
図版４　土毛地区
図版５　土毛地区
図版６　甲斐本地区
図版７　甲斐本地区
図版８　甲斐本地区
図版９　上芦原地区出土遺物
図版10　土毛・甲斐本地区出土遺物
図版11　甲斐本地区出土遺物

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

国道210号は、大分市の西部を走り、日田市を通り福岡県久留米市に至る。この道路は、国道10号とともに大分市における主要幹線道路で慢性的な交通渋滞が起きている。そこで大分土木事務所では、改良工事を平成６年から順次実施することとなり、同年県教育委員会文化課との協議を行った。

工事対象地が大分川流域で最大規模の条里地割が残る古国府遺跡群とよばれる周知の埋蔵文化財包蔵地であったため、ほぼ全面を重機による試掘調査を実施した。その結果、字甲斐本地区、字上芦原地区、字土毛地区において遺構・遺物が確認された。それぞれ用地買収の進捗状況と平行しながら本調査を実施した。甲斐本地区は平成７年６月～８月、上芦原地区が平成８年２月１日～３月10日、土毛地区が平成９年５月１日～31日まで行った。

２．調査組織

調査委員	末広利人（大分県教育庁文化課長・平成６～７年度）	
	後藤一郎（　同　　上　・平成８～９年度）	
調査主任	渋谷忠章（同文化課主幹兼埋蔵文化財第２係長・平成６～８年度）	
	清水宗昭（　同　　上	平成９年度）
調 査 員	玉永光洋（　同　主査	平成６～７年度）
	江田　豊（　同　主査	平成７～９年度）
	染矢和徳（　同　主任	平成７年度）
	吉田博嗣（　同　嘱託	平成７年度）
	豊田徹士（　同　嘱託	平成８年度）
	村上久和（　同　副主幹	平成９年度）
	渡辺重昭（　同　主査	同　上　）
	永井　実（　同　主任	同　上　）
調査事務	油布芳典（同課長補佐兼管理係長	平成６年度）
	山崎靖信（同　　上	平成７～８年度）
	河野孝一（同主幹兼管理係長	平成９年度）

3．遺跡の位置と環境

古国府遺跡群は大分市大字古国府、同羽屋、同荏隈付近に所在する。ここは、由布岳に源流を持つ大分川の下流域で、この川が北側に大きく蛇行する上野丘陵南側に形成された半円形を呈する沖積地のほぼ中央に位置する。

この地域は古代荏隈郷に属し、付近一帯には、古墳時代後期～奈良・平安時代にかけての主要な遺跡が密集するところである。古墳時代では、最近発見された6世紀前半の前方後円墳である永興千人塚古墳[註1]があり、ついで6世紀後半～7世紀初頭には、主体部が横穴式石室である弘法穴古墳－丑殿古墳－千代丸古墳と続き、7世紀中頃に主体部が石郭式石室である古宮古墳と首長墓系譜の古墳が認められる。これらは、『日本書紀』に記載されている大分君恵尺等に代表される大分君一族の奥津城と想定されている。

この古墳群に対する生活遺跡としては大きく上野丘陵とその下の沖積地に分かれ、沖積地では賀来条里跡、玉沢条里跡、古国府遺跡群、大道条里跡などにその痕跡が認められる。特に、古国府遺跡群では、7世紀中頃の羽屋・井戸遺跡や羽屋・園遺跡[註2]があり、丘陵地では上野竜王畑遺跡[註3]がそれぞれ認められる。これらの遺跡は大型掘立柱建物跡であり、古宮古墳と年代的に合致する[註4]ところから古代の役所的性格を備えた大分君一族の豪族居館であろうか。なお、玉沢条里跡では北ノ後遺跡が弥生時代から中世までの母村的集落であるが、古代の遺構は古国府遺跡群に比べその規模は小さい。8世紀には、玉沢、古国府、大道条里地割が、古国府には東西に延びる古代官道がそれぞれ認められる。また、この時期賀来条里跡では豊後国分寺が、古国府遺跡群では金剛宝戒寺跡、上野丘陵では上野廃寺[註5]、永興寺がそれぞれ建立され古代の宗教的世界を形成している。

以上のように古国府地区周辺は古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて豊後国の主要な中心地域の一つであったことが証明される。

註1　1998年　大分市教育委員会調査

註2　「豊後国府推定地周辺の発掘調査Ⅱ」　坪根伸也・塩地潤一　『大分県地方史』163号　1996年

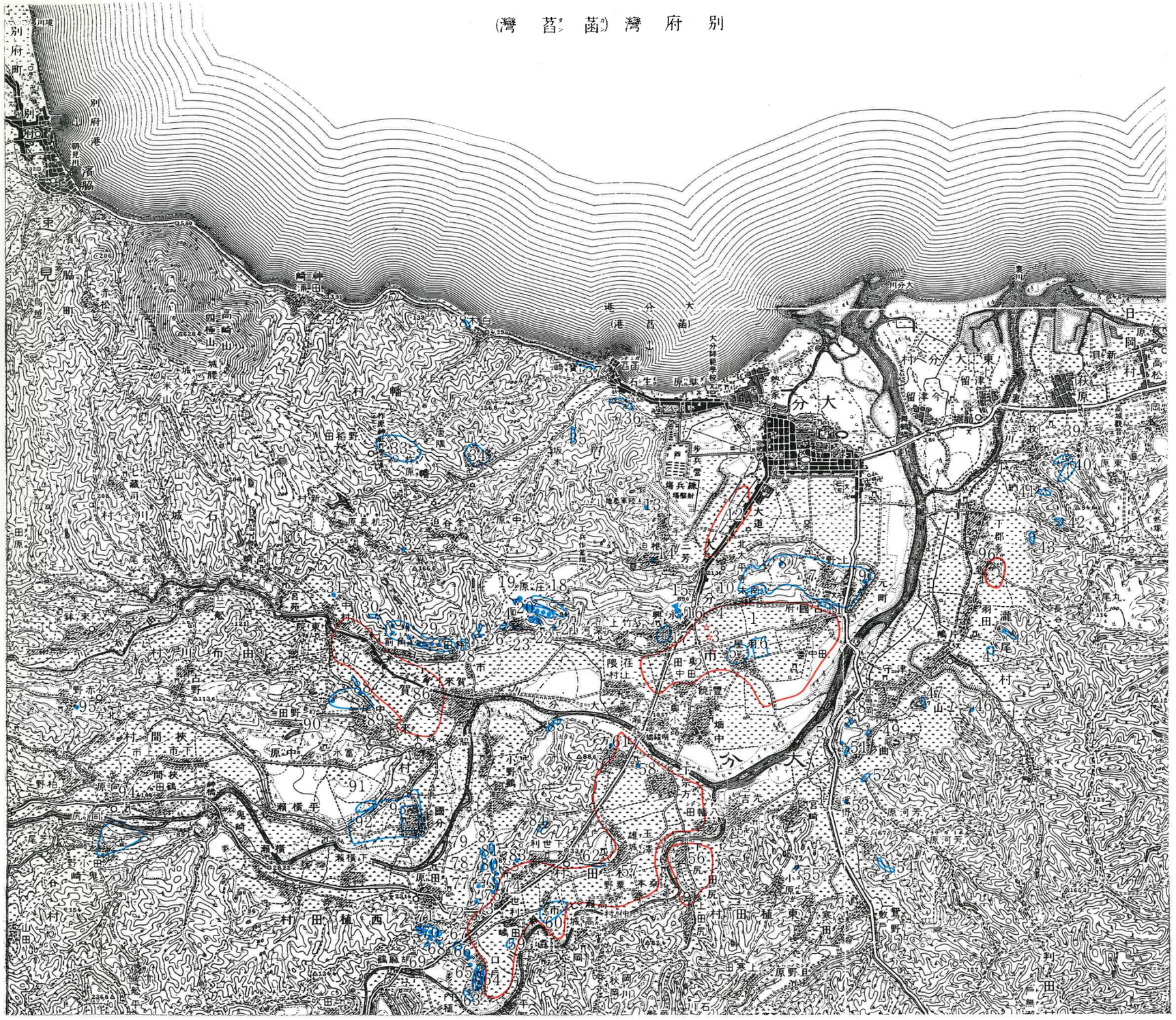
註3　1997年　大分県教育委員会調査

註4　註2に同じ

註5　1998年　大分市教育委員会調査

第1表　遺跡名一覧表

番号	遺跡名	種別	時期	番号	遺跡名	種別	時期	番号	遺跡名	種別	時期
1	古国府遺跡群	集落・条里他	弥生～古代	33	柞原八幡宮遺跡群	寺院跡他	古代	65	千人塚	墳墓	古墳
2	同上　甲斐本地区	条里他	弥生～古代	34	大崎遺跡	寺院	古代～中世	66	御陵古墳	墳墓	古墳
3	同上　土毛地区	包蔵地	弥生	35	穴蟹喰横穴墓群	墳墓	古墳	67	本夕上古道石棺	墳墓	古墳
4	同上　上芦原地区	条里他	弥生～古代	36	生石横穴墓群	墳墓	古墳	68	志土地横穴墓群	墳墓	古墳
5	羽屋園遺跡	集落	古代	37	蟹喰横穴墓群	墳墓	古墳	69	土肥横穴墓群	墳墓	古墳
6	金剛宝戒寺跡	寺院跡	古代	38	白木横穴墓群	墳墓	古墳	70	木ノ上峠横穴墓群	墳墓	古墳
7	上野遺跡群	館他	弥生～古代	39	松栄山横穴墓群	墳墓	古墳	71	山伏古墳群	墳墓	古墳
8	飯盛塚古墳	墳墓	古墳	40	高城石棺群	墳墓	古墳	72	稲荷古墳	墳墓	古墳
9	大臣塚古墳	墳墓	古墳	41	下郡横穴墓群	墳墓	古墳	73	世利門古墳	墳墓	古墳
10	南太平寺横穴墓群	墳墓	古墳	42	北下郡横穴墓群	墳墓	古墳	74	漆間古墳	墳墓	古墳
11	岩屋寺横穴墓群	墳墓	古墳	43	穴井前横穴墓群	墳墓	古墳	75	高来山横穴墓群	墳墓	古墳
12	大道条里跡	条里	古代	44	長谷横穴墓群	墳墓	古代	76	虎御前古墳	墳墓	古墳
13	亀甲山古墳	墳墓	古墳	45	滝尾百穴横穴古墳群	墳墓	古墳	77	大将軍古墳	墳墓	古墳
14	古宮古墳	墳墓	古墳	46	津守古墳	墳墓	古墳	78	大曽3横穴墓群	墳墓	古墳
15	丸山千人塚	墳墓	古墳	47	碇山横穴墓群	墳墓	古墳	79	大曽2横穴墓群	墳墓	古墳
16	弘法穴古墳	墳墓	古墳	48	滝尾守岡横穴墓群	墳墓	古墳	80	漆間横穴墓群	墳墓	古墳
17	永興遺跡	寺院跡	古代	49	曲迫横穴墓群	墳墓	古墳	81	六部塚古墳	墳墓	古墳
18	田崎遺跡	包蔵地	弥生～古代	50	守岡古墳	墳墓	古墳	82	大曽横穴墓群	墳墓	古墳
19	蓬莱山古墳	墳墓	古墳	51	曲平横穴墓群	墳墓	古墳	83	下迫古墳	墳墓	古墳
20	田崎古墳群	墳墓	古墳	52	一の迫横穴墓群	墳墓	古墳	84	椿ヶ丘横穴墓群	墳墓	古墳
21	深河内古墳	墳墓	古墳	53	芳川原古墳	墳墓	古墳	85	小野鶴横穴墓群	墳墓	古墳
22	万寿山古墳群	墳墓	古墳	54	穴井下横穴墓群	墳墓	古墳	86	賀来条里跡	条里等	古代～中世
23	丑殿古墳	墳墓	古墳	55	千人塚古墳	墳墓	古墳	87	小原横穴墓	墳墓	古墳
24	上片面横穴墓群	墳墓	古墳	56	下田尻地区条里跡	条里	古墳	88	中尾遺跡	包蔵地	古墳
25	井手ノ上横穴墓群2	墳墓	古墳	57	玉沢地区条里跡	条里他	縄文～古代	89	中尾古墳	墳墓	古墳
26	井手ノ上古墳	墳墓	古墳	58	同上　六反田地区	条里・集落他	古墳～古代	90	中尾古墳2号墳	墳墓	古墳
27	井手ノ上横穴墓群1	墳墓	古墳	59	同上　田仲地地区	集落他	古墳～中世	91	六重原遺跡	包蔵地	古墳
28	餅田横穴墓群	墳墓	古墳	60	植田市遺跡	集落他	古墳～中世	92	国分遺跡	包蔵地	古代
29	餅田古墳群	墳墓	古墳	61	北の後遺跡	集落他	弥生～中世	93	豊後国分寺跡	官衙・寺院	古代
30	岩御堂横穴墓群	墳墓	古墳	62	雄城台下横穴墓群	墳墓	古墳	94	北原遺跡	包蔵地	古墳
31	千代丸古墳	墳墓	古墳	63	岩崎横穴墓群	墳墓	古墳	95	赤野大園古墳	墳墓	古墳
32	金谷迫古墳	墳墓	古墳	64	浅草神社古墳群	墳墓	古墳	96	下郡遺跡群	集落、館他	弥生～中世



第１図　大分平野における古墳時代及び古代の遺跡分布図(大正元年発行　５万分の一「大分」大日本帝国陸地測量部発行)

第２章　各地区の調査

１．上芦原地区

１．調査の概要

前年度に試掘調査を行った結果、溝が確認されたため、平成９年２月から３月にかけて本調査を行った。当地区は地下水位が非常に高く、調査区西壁沿いにトレンチを入れ、排水ポンプを設置し水の汲み上げを行いながら調査は行われた。

調査対象面積約800㎡で、現耕作面より１ｍ程度で遺構検出面となる。検出された遺構は、溝が４条、不整形土坑が１基、大小のピットが70基前後である。

溝は、ほぼ東西に流れるものが２条、不定方向に流れるものが２条でいずれも時期を特定できる遺物は出土していない。ピットも明確に建物を想定できるものは無く、調査区北半部でほぼ東西に列をなすピット群が検出されたにとどまる。いずれも時期を示す遺物は出土していない。

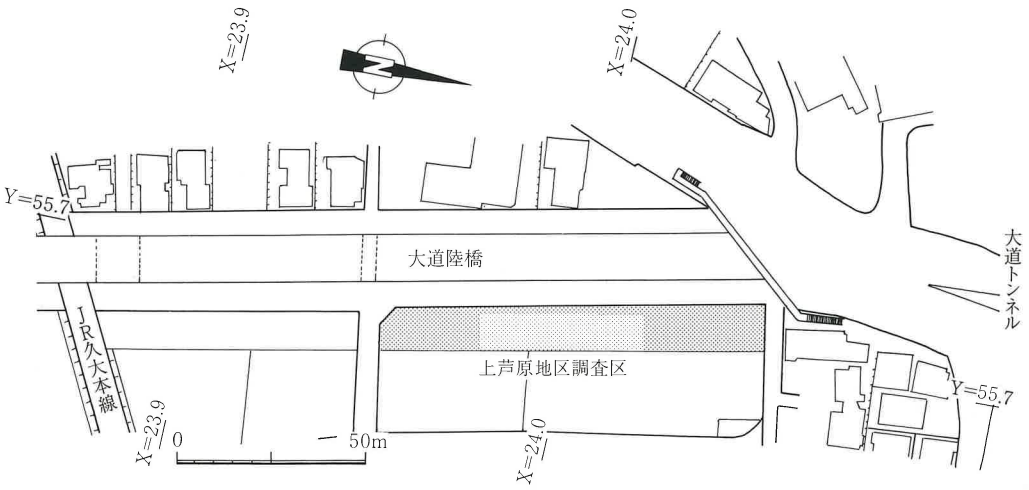
２．基本土層

当調査区の基本土層は第３図に示したようにⅧ層に分層でき、この中に数枚の水田面が認められる。ただし表土剥ぎの際に検分したところ、Ⅰ～Ⅴ層については近世の遺物も含まれていて比較的新しい年代に堆積したものと考えられる。Ⅵ・Ⅶ層は調査区全体に部分的に展開していて、浅い落ち込み部に堆積したものである。おそらく調査区を含めこの周辺には沼地状の湿地があったものと思われる。

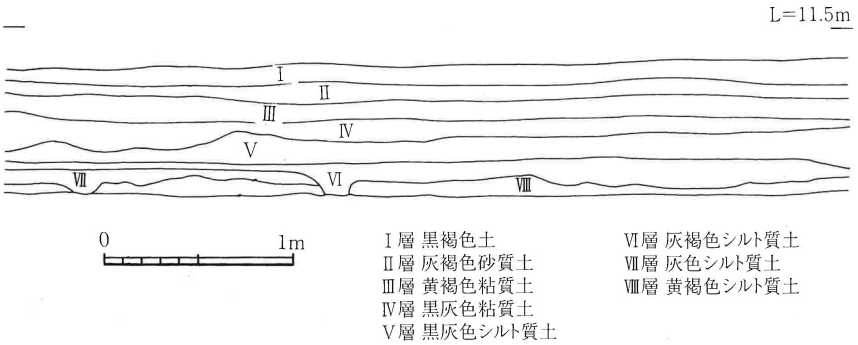
３．遺構と遺物

溝１

溝１はＨグリッドでほぼ東西方向に約７ｍ検出され、幅は1.5ｍ、深さ60㎝を測る。基本土層の第６層から掘りこまれていて、一時期に埋没した様相が見られる。上面から10数点の遺物が出土したが、時期を特定できるものは無かった。



第２図　古国府遺跡群上芦原地区調査区位置図（1／2000）



第３図　上芦原地区基本土層図（1／40）

溝２

溝２はＧグリッドをほぼ北東方向に約13ｍ検出された。幅約55cm、深さ20cmを測る。規模的には溝４とほぼ同じで調査区外でこの２本の溝はつながる可能性が高い。出土遺物は２点に留まりいずれも流れ込みであった。

溝３

溝３はＤグリッドをほぼ東西に流れる。当初幅１ｍの溝を想定していたが、精査の結果幅約60cmの溝が２本平行して掘られていたことが確認された。北側を溝３－Ａ、南側を溝３－Ｂとする。土層観察でまず溝３－Ｂが掘られ、掘りなおす形で溝３－Ａが造られている事が確認された。溝の規模は２条の溝はともに長さ約８ｍ、幅50cm、深さ10cmを測る。いずれの溝も時期を特定できるような遺物は出土していない。

溝４

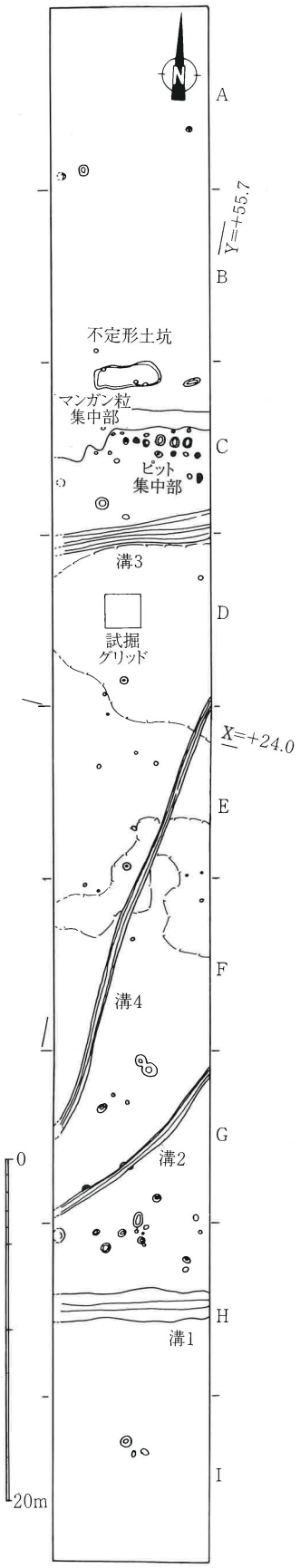
ＥグリッドからＧグリッドまで北北東に約27ｍ検出された。幅45cm、深さ20cmを測る。遺物は全く出土していない。

不定形土坑

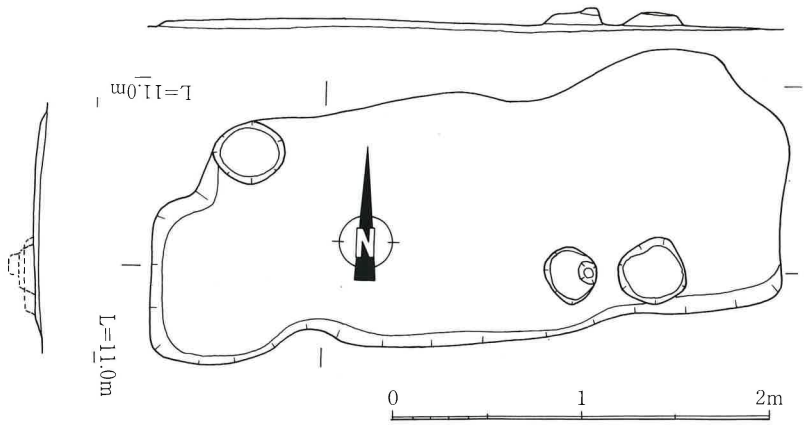
Ｃグリッドで検出された。長軸3.3ｍ、短軸1.3ｍで上部はかなり削平され北側及び東側の壁の立ち上がりはほとんど見ることが出来ない。内部にピットが３基あるがこの遺構に伴うものではない。時期を特定できる遺物は出土していない。

ピット集中部

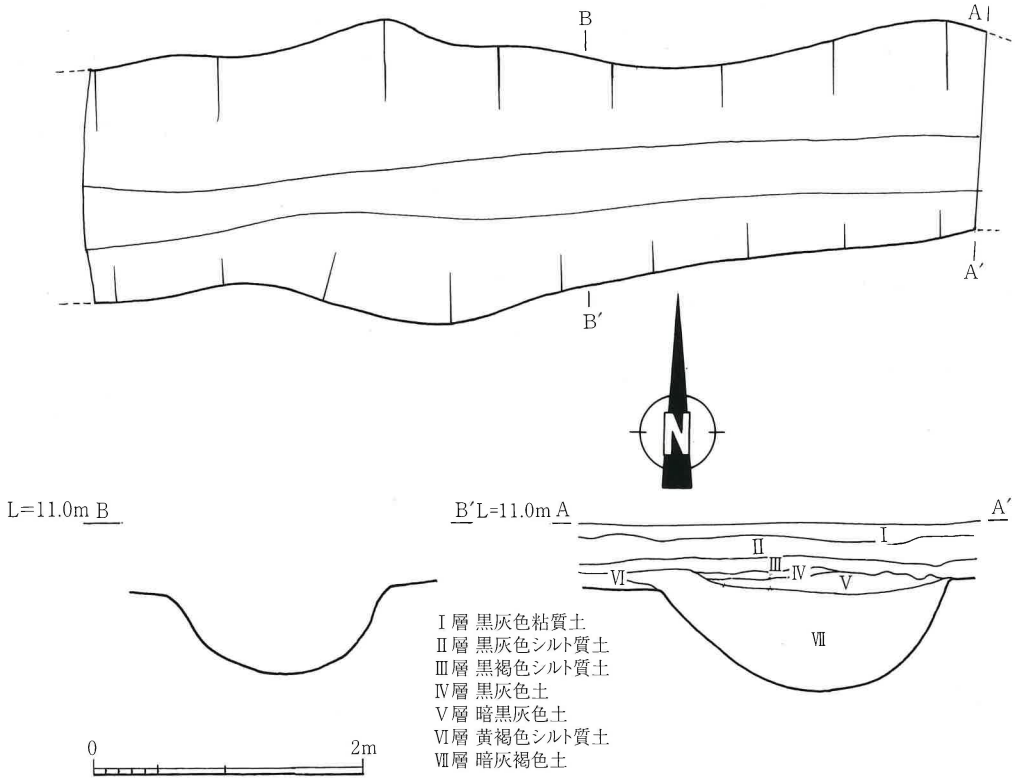
Ｃグリッドで、直径50cm程度のピットが６基列をなして検出された。いずれのピットも上部は大きく削平され本来の深さは想定できない。また遺構の広がりからもこれ以上東西方向に広がらないようである。



第４図　上芦原地区遺構配置図(1／400)



第５図　不整形土坑実測図（１／40）

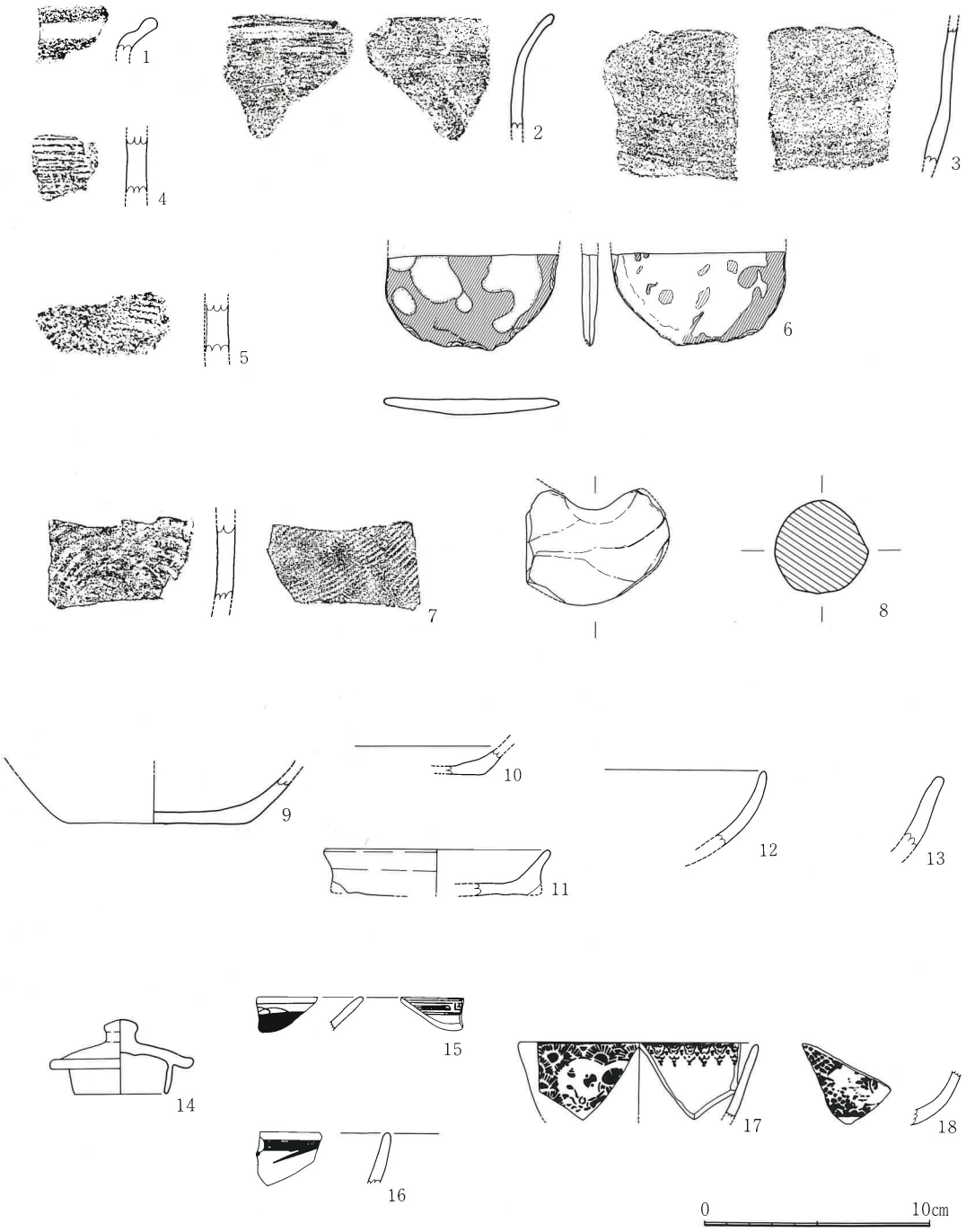


第６図　溝１平面・断面・土層実測図（1／60）

４．小結

上芦原地区の調査では、遺構の存在は確認できたもののこれに付随して遺物がほとんど出土しておらず遺構の時期の特定が出来なかった。しかし旧地形が低湿地に近い状況であり、生活面ではなく生産行為が行われた場であったと思われる。また遺構の中でも溝１と溝３はともに主軸がほぼ東西方向を示すもので、およそ45ｍの間隔を持つ２本の溝は甲斐本Ｆ区で検出された溝と同じ方向であり、現在残る条里地割以前の遺構の可能性もある。

さらに調査で縄文土器や古墳時代の土器もわずかに出土していることから、この調査区の北側に展開する丘陵地域に当該時期の遺跡が存在する可能性がある。



第７図　上芦原地区出土遺物実測図（1／3）

第２表　上芦原地区出土遺物観察表

No.	出土位置 遺構	種別	器種	規格( )つきは復元径・単位(cm) 器高	口径	底径	胎　土	調　整 内 面	外 面	焼成	色　調 内 面	外 面	断 面	使用痕	備考
1	溝４	縄文土器	浅鉢				角閃石、石英含む	ナデ	縄文	通有	黒色 (Hue2.5Y2／1)	黄灰色 (Hue2.5Y5／1)	同左		口縁部
2	試掘	縄文土器	深鉢				角閃石、石英、石粒を多く含む	貝殻条痕	貝殻条痕	通有	黒褐色 (Hue10YR3／1)	同左	同左		口縁部
3	試掘	縄文土器	深鉢				角閃石、石英、白色石粒を多く含む	条痕？	条痕？	不良	褐灰色～黒褐色(Hue10YR5／1.3／1)				胴部
4	試掘	須恵器	甕				石英粒含むが精緻	同心円タタキ後ナデ消し	平行タタキ	良好	灰色 (HueN6／～5／)	同左	同左		胴部
5	試掘	縄文土器	鉢				角閃石を多く含む	不明	縄文(RL)	不良	灰白色 (Hue2.5Y8／1)	同左 (一部鉄分有)	同左		胴部
6	試掘 (ピット1)	扁平打製石斧		長さ 4×2	幅7.7	厚0.7								有	重さ26.7g
7	試掘	須恵器	甕				石英粒含むが精緻	同心円タタキ	平行タタキ	良好	灰色 (HueN7／)	同左	同左		胴部
8	試掘	土師器	甑				角閃石、石英微砂粒を多く含む	不明	ナデ	良好		橙色 (Hue2.5YR7／8)	同左		把手
9	試掘	土師器	坏				角閃石含むが精緻	不明	不明	通有	灰白色 (Hue7.5Y)	同左	同左		底部
10	試掘	土師器	小皿？				角閃石含むが精緻	不明	不明 (底部糸切り)	不良	黄橙色 (Hue7.5Y7／8)	同左	同左		底部
11	試掘	土師器	小皿	2.1	(10)	(9.3)	安山岩粒を少量含むが精緻	不明	不明	通有	灰白色 (Hue7.5Y8／1)	同左	同左		復元完形
12	試掘	土師器	椀				角閃石、赤色粒を含むが精緻	不明	不明	不良	浅黄橙色 (Hue10YR8／6)		同左		口縁部
13	表採	土師器	椀				精緻	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	淡橙色 (Hue5YR8／4)	同左	橙色 (Hue2.5YR7／8)		口縁部
14	水田層	唐津焼	蓋	3.2	4.2		精緻								完形
15	水田層	伊万里焼	碗												染付口縁
16	水田層	伊万里焼	碗												染付口縁
17	水田層	伊万里焼	碗												染付口縁 型紙摺
18	水田層	伊万里焼	碗												染付口縁 型紙摺

２．土毛地区

１．調査の概要

土毛地区の調査は、大分土木事務所の残土処理に立ち会うかたちで調査を開始した。調査区は甲斐本地区の終了地点からＪＲ久大本線を越えた地点まで約600㎡で、ＪＲ久大本線より南をＡ区、北をＢ区と設定した。Ａ区はさらに二つの水路をはさみＡⅠ区～ＡⅢ区に分けた。(第10図～第11図参照)

調査期間は早梅雨の５月７日～30日までであった。

２．基本土層

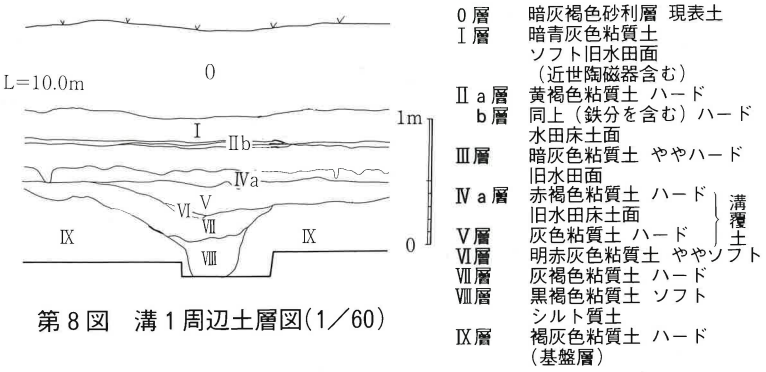
本調査区は、旧状は宅地であったため標高10.0ｍまでは砂利層で覆われていた。その下層に２面の水田面が認められた。いずれも下面に鉄分の沈殿が認められるところから乾田法の水田であろう。上面の水田層からは近世の伊万里焼碗片が出土している。その下層にはシルト質の黒褐色土層が部分的に認められる。この層をカットして溝２はつくられている。この層中より弥生時代中期～後期初頭の土器片が出土している。最下層は褐灰色の粘質土で基盤層である。

3．遺構と遺物

A区の調査

ＡＩ区では、表土下1.5ｍの基盤層にシルト質の黒色土が人間の足跡状に認められた。

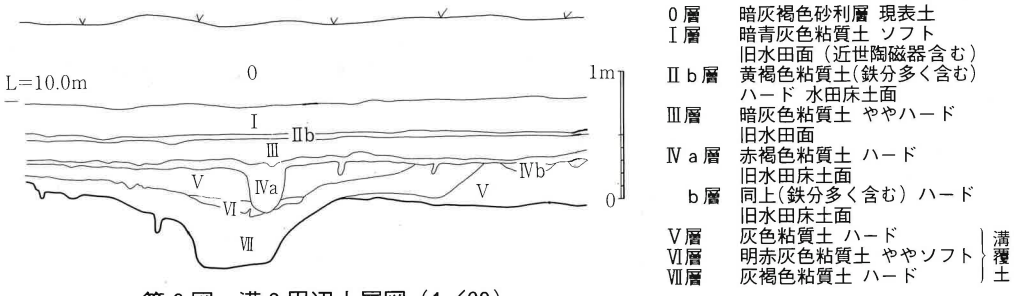
（巻頭図版参照）そこで、別府大学坂田邦洋助教授に鑑定と石膏型取りを行ってもらった。坂田氏によれば、老人、大人、子供の足跡が認められるとのことである。



第８図　溝１周辺土層図(1／60)

ＡⅡ区では、表土下70㎝の所で弥生時代の東西方向の溝３条と不整形土坑２基、ピット８基を検出した。

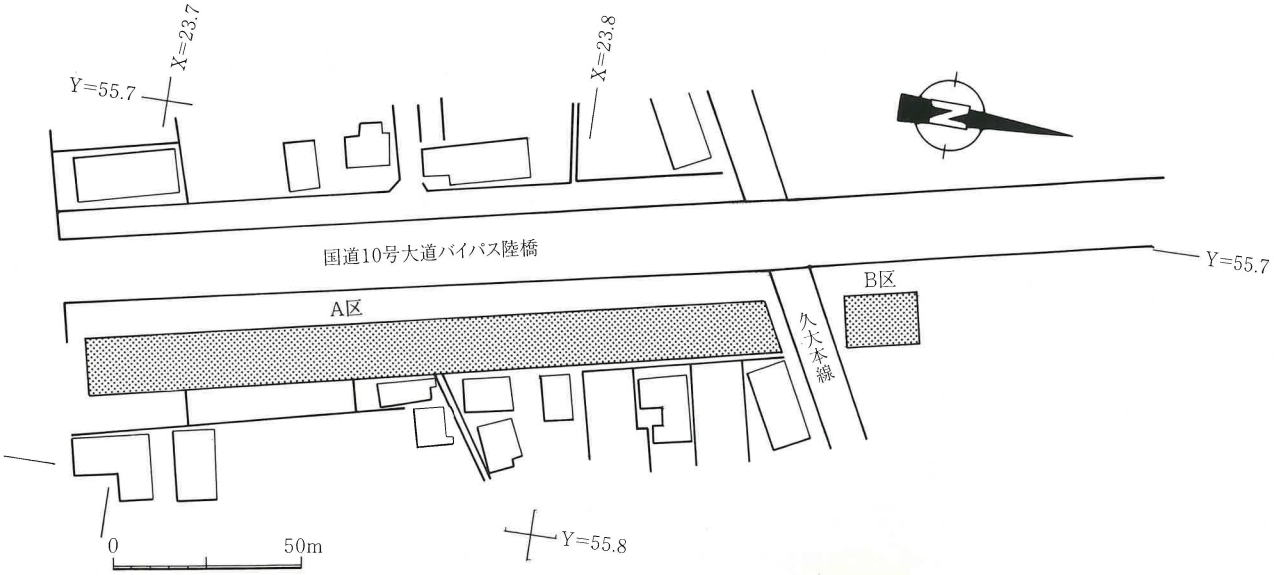
ＡⅢ区では、遺構・遺物の検出はなかった。



第９図　溝２周辺土層図（1／60）

溝１（第12図）

調査区の南側を南西から北東方向に延びる溝で、規模は小溝状を呈している。調査区内での長さ7.7ｍ、最大幅は上面で1.0ｍ、底面で0.35ｍを測り、断面逆台形を呈している。覆土は灰色粘質土を主体としており、



第10図　古国府遺跡群土毛地区調査区位置図

各土層に大きな変化はない。遺物の出土は少なく東西壁際に集中する。縄文晩期土器片（第15図１～５）、弥生中期土器片（第15図６～９）、磨製石斧基部片（第14図１）などが出土している。溝の埋没時期は弥生時代中期後半に比定される。

溝２（第12図）

調査区の中央を東西方向に若干弧状に延びる溝で、規模は小溝状を呈している。調査区内での長さ5.1ｍ、幅は北側上面が２段掘になっており、最大幅1.2ｍ、底面で0.35ｍを測り、断面逆台形を呈している。覆土は灰色粘質土を主体としており、各土層に大きな変化はない。遺物の出土は少なく東壁際に集中する。縄文後期土器片（第15図21）、弥生中期土器片（第15図11）などが出土している。溝の埋没時期は弥生時代中期中頃～後半に比定される。

溝３（第12図）

調査区の北側を北西から南東方向に延びる溝で、規模は小溝状を呈している。調査区内での長さ7.0ｍ、最大幅は上面で0.6ｍ、底面で0.35ｍを測り、断面逆台形を呈している。覆土は灰色粘質土を主体としており、各土層に大きな変化はない。遺物の出土は少なく土器小片がほぼ中央より東壁際に集中する。縄文後期土器片（第15図14）、弥生終末期土器片（第15図15～18）が出土している。溝の埋没時期は弥生時代終末期に比定される。

１号土坑（第12図）

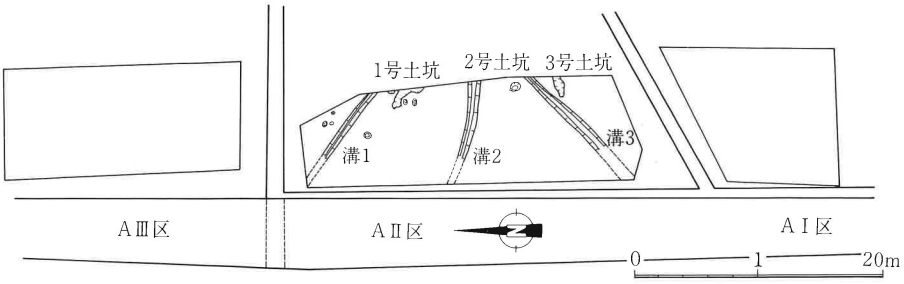
調査区の北東隅に半分のみ検出した。最大長約1.8ｍ、最大幅2.3ｍ、深さ0.1ｍを測る。不整形な掘り方を呈す。断面は船底状を呈している。覆土は灰色粘質土である。出土遺物は、弥生土器小片が１点出土した。

２号土坑（第12図）

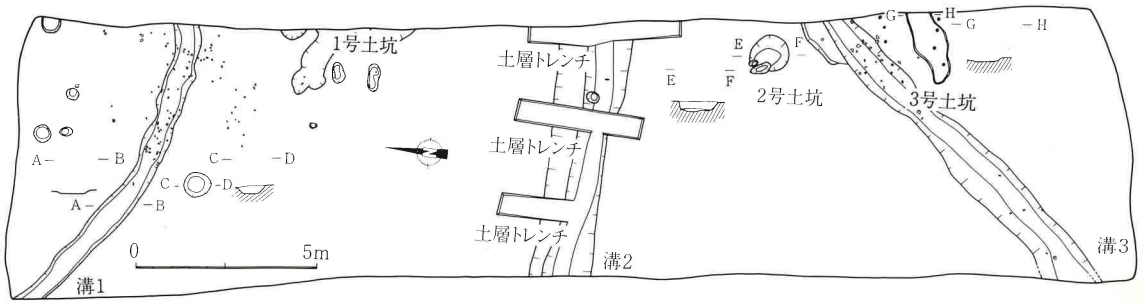
調査区の南東端で検出した。上面は削平されており最大長約1.0ｍ、最大幅0.8ｍ、深さ0.15ｍを測る。楕円形で断面は船底状を呈する。覆土は灰色粘質土である。出土遺物はなかった。

３号土坑（第12図）

調査区の南東隅に全体の約3分の2を検出した。上面はほとんど削平されており、最大長約1.8ｍ、最大幅2.3ｍ、深さ0.1ｍを測る。不定形な楕円形を呈す。断面は船底状を呈している。覆土は灰色粘質土である。出土遺物は、弥生土器小片が５点出土した。



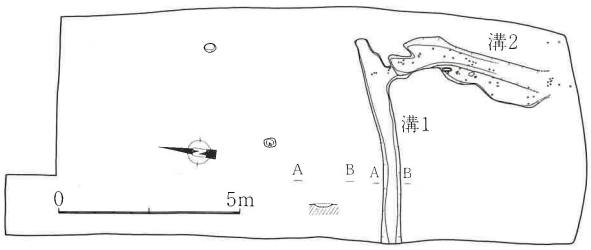
第11図　土毛Ａ区調査地点遺構図（1／600）



第12図　土毛ＡⅡ区遺構平・断面図（1／80）

B区の調査

B区では、表土下1.4mの所で弥生時代の東西方向の溝1条と南北方向の溝1条ピット2基を検出した。すべて削平されており旧状を留めていない。



第13図　土毛B区遺構平・断面図（1／80）

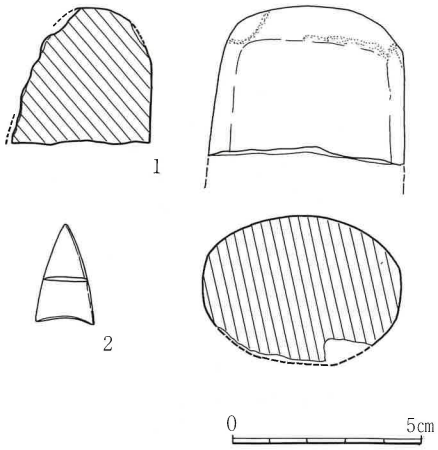
溝1

調査区の中央を東西方向に延びる溝で、規模は小溝状を呈している。調査区内東側は切れており、長さ5.0m、最大幅0.4m、底面で0.2m、深さ0.1mを測り、断面逆台形を呈している。覆土は灰褐色粘質土である。

遺物の出土は少なく東際に集中する。弥生土器片が出土している。溝の埋没時期は2号溝との切り合いから少なくとも弥生時代終末期以前と考えられる。

溝2

1号溝の東側をカットして南北方向に延びる溝で、規模は小溝状を呈している。溝の南側は後世に削平されており、長さ3.7m、最大幅0.6m、深さ0.2mを測り、断面逆台形を呈している。覆土は暗灰褐色粘質土である。遺物は溝全体に弥生土器小片が散布しており、これを接合した結果、弥生時代終末期～古墳時代初頭の直口壺であることが判明した。



第14図　土毛地区出土石器実測図（1／2）

4．小結

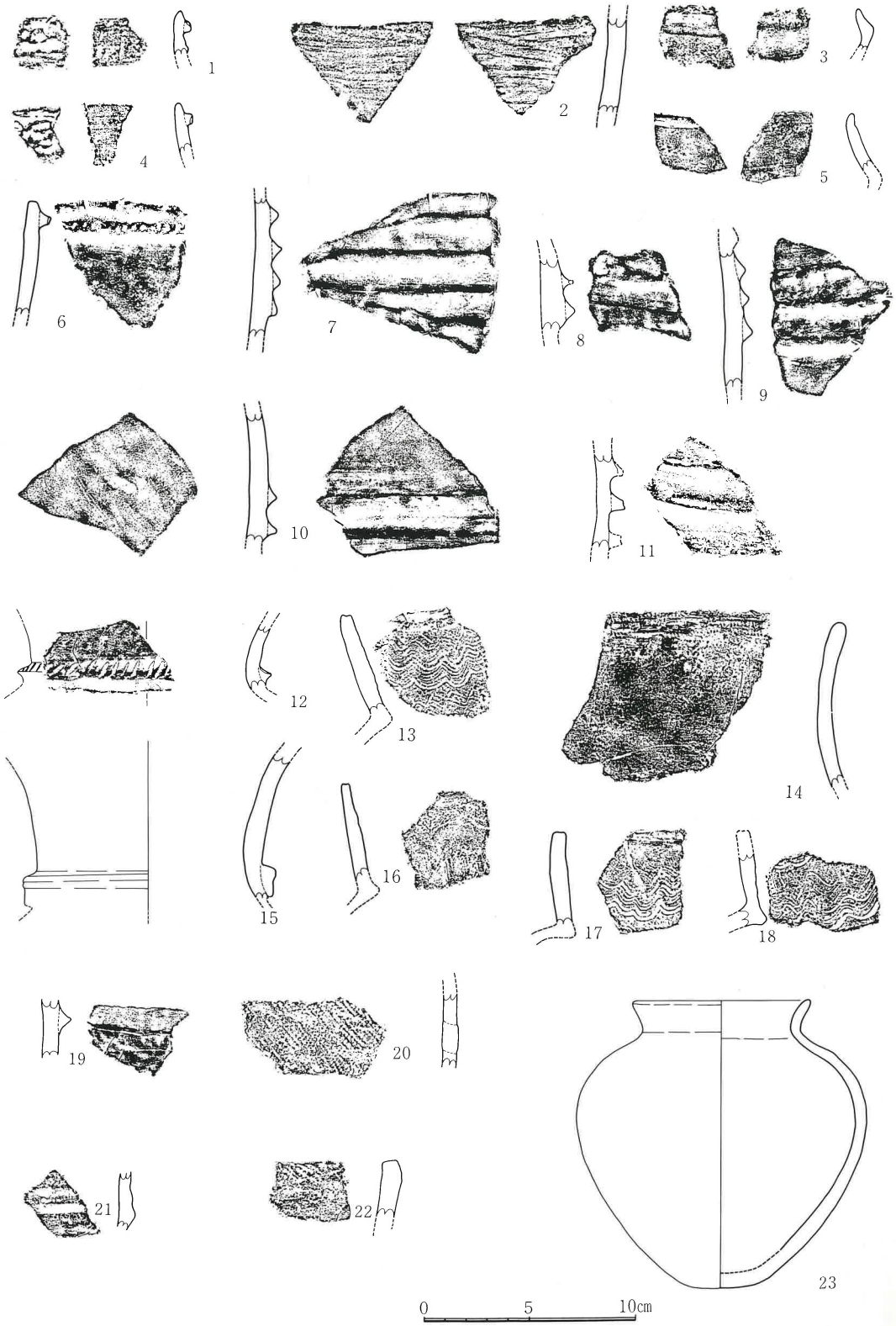
土毛地区の調査では、遺構としては弥生時代の溝および同時期のものと推定される人間の足跡を検出した。弥生時代の溝は、中期中頃～後半期に埋没したもの2条、同終末期～古墳時代初頭に埋没したもの2条である。

第3表　土毛地区出土石器観察表

No.	出土位置遺構	種別	器種	備　考
1	A区溝1	緑泥片岩	磨製石斧	基部 重　さ　45g 厚　さ　4cm 現存長　4cm
2	B区溝2	緑泥片岩	磨製石鏃	重　さ　0.9g 厚　さ　0.1cm 全　長　2.5cm 最大幅　1.5cm

中期中頃～後半期のものは東西方向に延びるもので各溝とも西側に向かって低くなっているのが特徴である。土層の検討から水田に伴う溝と判断したが、プラント・オパール分析の結果、弥生時代は沼地であることが判明した。この結果にしたがうと溝は、小沼から水田に向かって引かれたものであることが推定でき、その水田は調査区の西側に広がっていたとも予想される。また、小沼から水を引くためには溜井状の施設が必要であり、これは調査区の東側あるいは南側に想定される。特に1号溝の南は自然の沼地状になっており、そこで魚取りなどをしたのであろうか老若男女の足跡が検出されている。いずれにしても現在までのところ、古国府遺跡群では水稲栽培が弥生時代中期中頃までさかのぼる可能性はでてきた。さらに弥生時代後期終末～古墳時代初頭には、東西方向の溝とともに南北方向の溝も認められるようになる。このことは水田の拡大とかさなったものと考えられる。なお、当然ではあるがこれらの溝は磁北方向とは何らの関係もなく造られている。

次に、遺物から推定すると発掘調査区内の人の生活痕は縄文後期後半から認められる。このような現象は大分川下流域の自然堤防状におしなべて見られるもので、晩期まで下るものを含めて同じような地形に立地する遺跡として稙田市遺跡、玉沢地区条里跡遺跡群内二反田地区、同山伏田地区、荏隈杉下遺跡などが認められる。これは、いわゆる桑飼下型経済類型と呼ばれる根茎栽培を行うのに適した土地の開発が行われた結果と推定されている。



第15図　土毛地区出土土器実測図（1／3）

第４表　土毛地区出土土器観察表

No.	出土位置	種別	器種	規格( )つきは復元径単位(cm)		胎土	調整		焼成	色調	備考
				器高	口径		内面	外面		内面・外面・断面	
1	A区 溝-1 中層	縄文土器	鉢片			角閃石を多く含む	貝殻条痕		通有	灰白色 (Hue 7.5YR 6/2)	口縁部片
2	A区 溝-1 P-36	縄文土器	鉢片			角閃石を多量に含む	貝殻条痕		良好	灰白色 (Hue 7.5YR 8/2)	胴部片
3	A区 溝-1 フクド上層	縄文土器	鉢片			角閃石粒含むが精緻	貝殻条痕		通有	灰白色で一部黒色	口縁部片
4	A区 溝-1 P-27	縄文土器	鉢片			角閃石粒含むが精緻	貝殻条痕	ナデ？	良好	明褐灰色 (Hue 5YR 7/1)	口縁部片
5	A区 溝-1 中層	縄文土器	鉢片			角閃石を多量に含む	ナデ		通有	黒色	口縁部片
6	A区 溝-1 P-17	弥生土器	甕片			角閃石を多量に、石英粒を少し含む	全体に磨滅していて調整不明		通有	灰白色 (Hue 7.5YR 8/2)	口縁部片 (下城式)
7	A区 溝-1	弥生土器	壺片			角閃石粒、長石粒を含むが精緻	全体に磨していて調整不明		良好	灰白色 (Hue 7.5YR 8/1)	胴部片
8	A区 溝-1 P-5	弥生土器	壺片			角閃石粒含むが精緻	全体に磨滅していて調整不明		通有	灰白色 (Hue 7.5YR 8/2)	胴部片？
9	A区 溝-1 P-32	弥生土器	壺片			角閃石、石英粒を含むが精緻	ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラミガキ	良好	灰白色 (Hue 7.5YR 8/2)	胴部片？
10	A区 溝-1	弥生土器	壺片			角閃石粒、長石粒を含むが精緻	ナデ、部分的にハケメ痕	ヘラミガキ ヨコナデ	良好	灰白色 (Hue 7.5YR 8/1)	胴部片
11	A区 溝-2 P-1	弥生土器	壺片			角閃石、石英粒を含むが精緻			良好	灰白色 (Hue 7.5YR 8/2) 浅黄橙色(Hue 7.5YR 8/6) 灰白色 (Hue 7.5YR 8/2)	胴部片？
12	A区 溝-3 P-81	弥生土器	壺片			角閃石粒含むが精緻			良好	灰白色 (Hue 5YR 8/1)	頸部片
13	A区 溝-3 P-7	弥生土器	壺片			角閃石、石英を多く含む	ヨコナデ	櫛描波状文	良好	淡黄色 (Hue 2.5YR 8/3～8/4)	口縁部片
14	A区 溝-3 P-11	縄文土器	深鉢片			角閃石を多く含むが精緻	ヘラミガキ	凝縄文 ヘラミガキ	良好	褐灰色 (Hue 5YR 6/1)	口縁部片
15	A区 溝-3 P-30	弥生土器	壺片				ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	良好	淡褐色 (Hue 2.5YR 8/3～8/4)	頸部片
16	A区 溝-3 P-9	弥生土器	壺片			角閃石粒を多く含むが精緻	ヨコナデ	櫛描波状文 ヨコナデ	良好	橙色 (Hue 5YR7/6) 淡黄色 (Hue 2.5YR 8/3～8/4) 橙色 (Hue 5YR7/6)	口縁部片
17	A区 溝-3 P-10	弥生土器	壺片			角閃石、石英を多く含む	ヘラミガキ	櫛描波状文	良好	淡黄色 (Hue 2.5YR 8/3～8/4)	口縁部片
18	A区 溝-3 P-6	弥生土器	壺片			角閃石粒を多く含む	ヨコナデ	櫛描波状文	良好	淡黄色 (Hue 2.5YR 8/3～8/4)	口縁部片
19	B区 溝-1 P-3	弥生土器	壺片			角閃石、石英、赤色粒を含む	磨滅により調整不明		通有	灰白色 (Hue 10YR 8/2)	胴部片
20	B区 溝-2 下層	縄文土器	鉢片				条痕	縄文	良好		胴部片
21	B区 溝-2 下層	縄文土器	鉢片			角閃石を含む	条痕？	縄文・条痕？	通有	明褐色 (Hue 5YR 7/1～8/2)	口縁部片？
22	B区 溝-2 下層	縄文土器	鉢片			角閃石を含む	調整不明		不良	灰白色 (Hue 10YR 8/2)	口縁部片
23	B区 溝-2 下層 E群	弥生土器	坩	13.5	(6.2)	砂粒多い	ナデ	ナデ	良好	淡褐色	完形

3．甲斐本地区

1．調査の概要

甲斐本地区の調査は、平成７年６月～８月にかけて行った。調査区は、土毛地区の終了地点から南に約170ｍの地点まで調査面積は約1300㎡で、南から６地点に分け各地点をＡ～Ｆ区に設定した。（第16図）

2．基本土層

本調査区は、旧状はビルなどの大型建物が建っていたため建物の基礎により遺構がすでに破壊されている箇所もあった。調査区の北側では表土下に２面の水田面が確認され、その下層が溝などの遺構検出面となる。Ａ区では３面の水田面が確認され、その下層に溝が検出された。

3．遺構と遺物

Ａ区の調査

Ａ区では、ほぼ東西方向に延びる溝がほぼ同一地点で３条を検出した。それぞれの溝に切り合い関係はない。なお覆土中より滑石製子持勾玉が出土している。

溝１（第17図）

この溝は、ほぼ東西方向に延びる溝で北側は現代のコンクリート基礎で削平されている。規模は濠状を呈している。調査区内での長さ6.0ｍ、最大幅は土層の確認で上面が1.9ｍ、底面で0.7ｍ、深さ30㎝を測り、断面はほぼ逆台形を呈している。覆土は２層で、Ⅰ層は酸化鉄の沈殿層、Ⅱ層は黒褐色粘質土である。出土遺物は、須恵器坏身片、土師器甕片などが出土し、埋没時期は、出土土師器甕片から７世紀前半頃である。

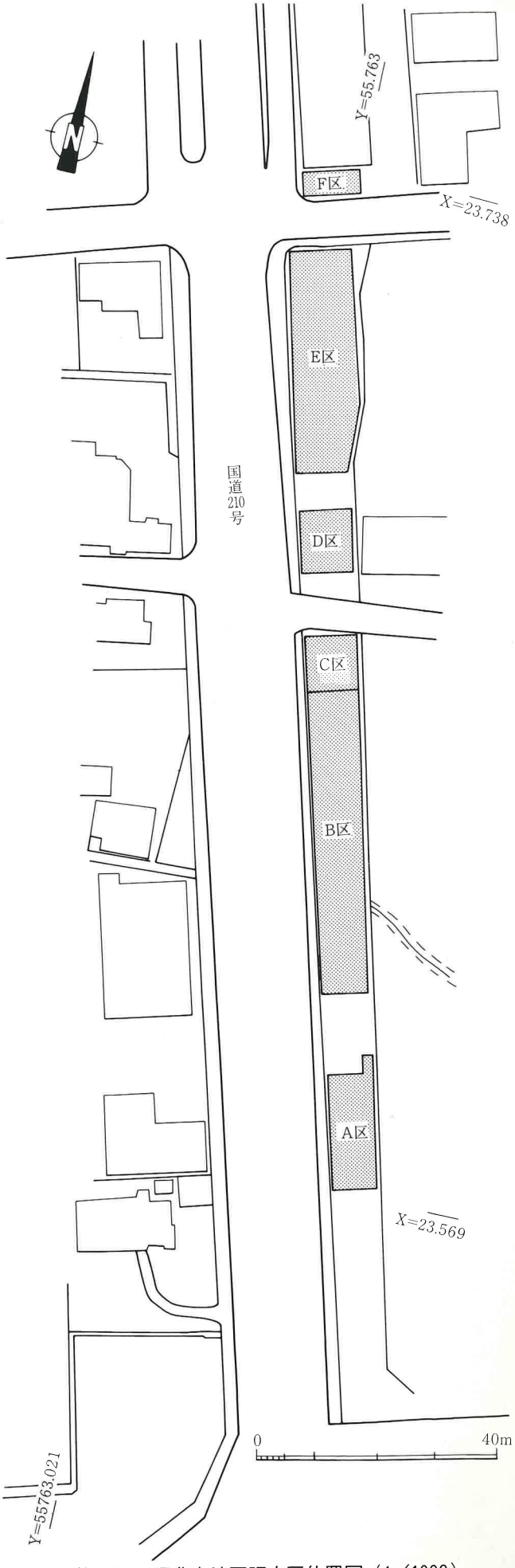
溝２（第17図）

この溝は、ほぼ東西方向にのびる溝で北側は現代のコンクリート基礎で削平されている。規模は濠状を呈している。調査区内での長さ7.0ｍ、最大幅は土層の確認で上面が3.2ｍ、底面で0.7ｍ、深さ30㎝を測り、断面はほぼ逆台形を呈している。覆土は３層に分かれ、Ⅰ層は酸化鉄の沈殿層、Ⅱ層は黒灰色砂質土、Ⅲ層は黒褐色粘質土である。

出土遺物は溝全体に土師器甕を主体にした小破片が多く出土した。埋没時期は５世紀中頃前後のものである。

溝３（第27図）

この溝は、現代のコンクリート基礎でほとんど削平されており、調査区壁の土層でのみ確認した。ほぼ東西に延びると推定されるものである。規模は濠状を呈している。調査区内での長さ1.0ｍ、土層で確認された幅3.2ｍ、深さ0.5ｍを測り、断面は緩やかな弧状を呈し下端が明確でない。覆土は３層に分かれ、Ⅰ層は酸化鉄の沈殿層でⅡ層は暗灰色粘質土、Ⅲ層は黒褐色土である。



第16図　甲斐本地区調査区位置図（1／1000）

出土遺物は、土師器高坏坏部片（第19図）などである。埋没時期は４世紀末～５世紀前半前後のものである。

Ｂ区の調査（第21図・第27図）

Ｂ区は、南側からⅠ、Ⅱ、Ⅲ区と設定して調査を行った。ＢⅠ区では、字境に使用されている東西方向の溝１条（溝１）とその下層にほぼ南北方向に延びる溝１条（溝２）およびピット８基、楕円形土坑２基および６層中より仿製の乳文鏡や鉄製品が、ＢⅡ区では、掘立柱建物跡１棟(１号掘立柱建物)とピット５基、ＢⅢ区では溝１条(溝３）およびピット22基をそれぞれ検出した。

溝１（第21図）

この溝は、東西方向に延びるもので、規模は小溝状を呈している。調査区内での長さ6.5ｍ、最大幅１ｍ、深さ0.2ｍを測り、断面逆台形を呈している。覆土は１層で、灰褐色砂質土である。出土遺物は、近・現代のものと思われるガラス片などが出土した。

溝２（第21図）

この溝は、ほぼ北東～南西方向に延びる溝で、規模は濠状を呈している。調査区内での長さ7.5ｍ、最大幅は上面で1.6ｍ、底面で0.5～１ｍ、深さ20㎝を測り、断面逆台形を呈している。覆土は２層に分かれ、上層は黒褐色粘質土、下層は暗褐色砂質土である。

出土遺物は土師器甕・小型丸底坩などが出土した。埋没時期は古墳時代初頭頃である。

溝３（第27図）

この溝は、ほぼ南東～北西方向に延びる溝で上面は後世に削平されている。規模は小溝を呈している。調査区内での長さ5.3ｍ、最大幅は上面で0.8ｍ、底面で0.7ｍ、深さ５㎝を測り、断面逆台形と思われる。覆土は１層で、暗褐色砂質土である。

出土遺物は少なく埋没時期は不明である。

１号掘立柱建物跡（第21・24図）

桁行方向は調査区外になり、その規模は不明である。主軸方向は、Ｎ－23°－Ｅで桁行２間以上、梁行２間を測る。芯々距離は、桁行で1.9ｍ前後、梁行で1.6ｍを測る。

出土遺物は桁方向の柱穴より土師器坏底部片（ヘラ切り？）が出土した。

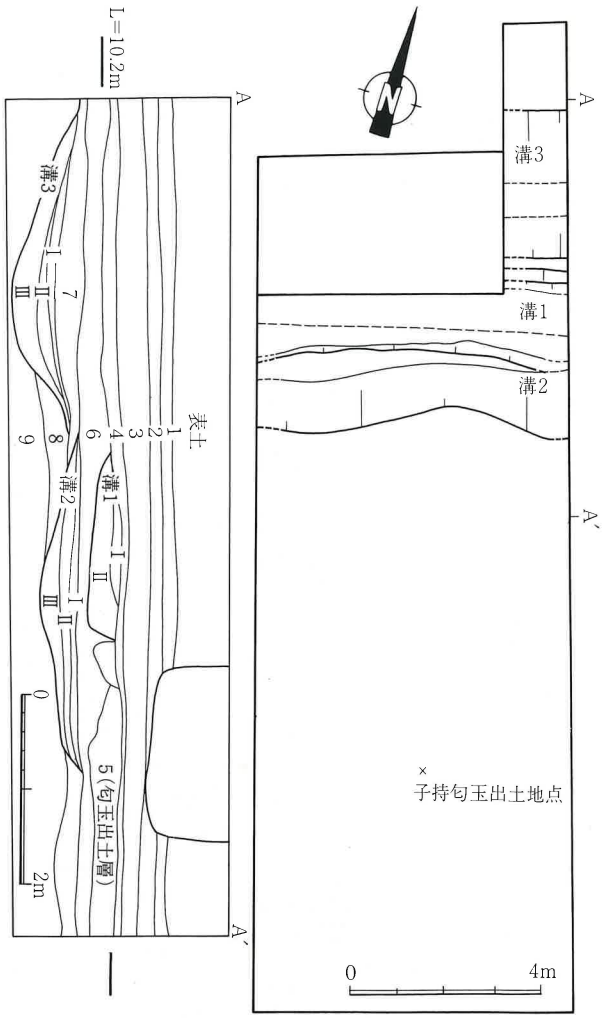
１号土坑（第21図）

調査区の南端でその一部を検出したが、主体は調査区外にある。形状は楕円形と思われる。出土遺物は、須恵器高坏脚部片である。時期は６世紀後半である。

２号土坑（第22図）

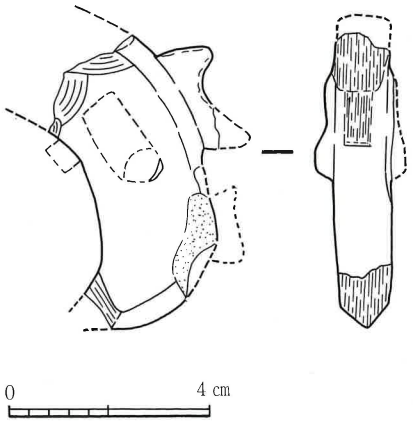
調査区南側で検出した。形状は楕円形を呈し、長軸0.6ｍ、短軸0.5ｍ、深さ0.15ｍを測る。

出土遺物は須恵器の甕胴部片とフイゴ羽口片及び鉄片1点、鉄滓10点が出土した。時期は６世紀後半～７世紀初頭前後である。

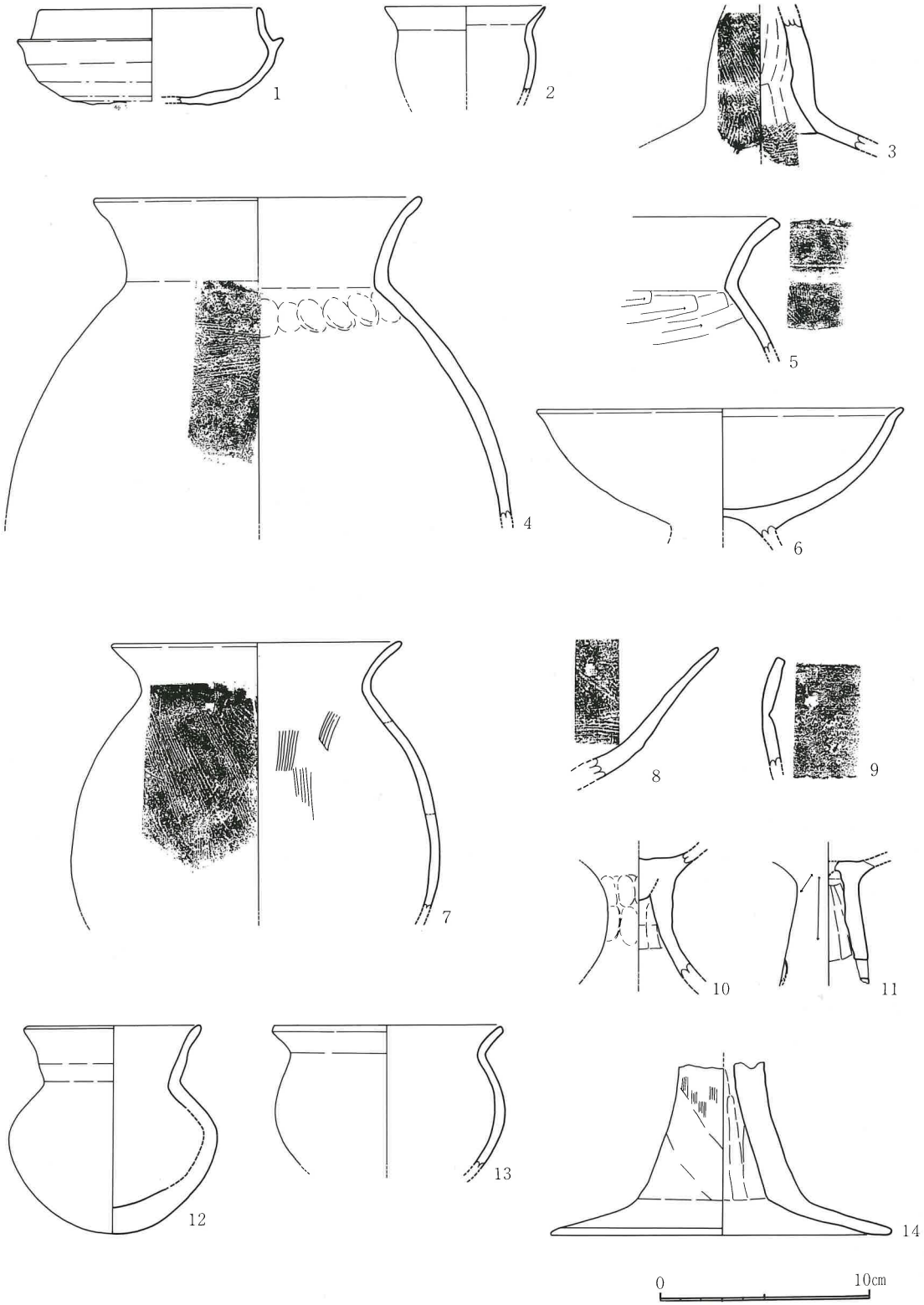


1層　灰褐色粘質土層
2層　灰褐色粘質土層
3層　暗灰褐色粘質土層
4層　暗褐色砂質土層
5層　黒褐色砂質土層
6層　灰褐色砂質土層
7層　暗灰色砂質土層
8層　暗灰色砂層
9層　灰黄褐色砂層

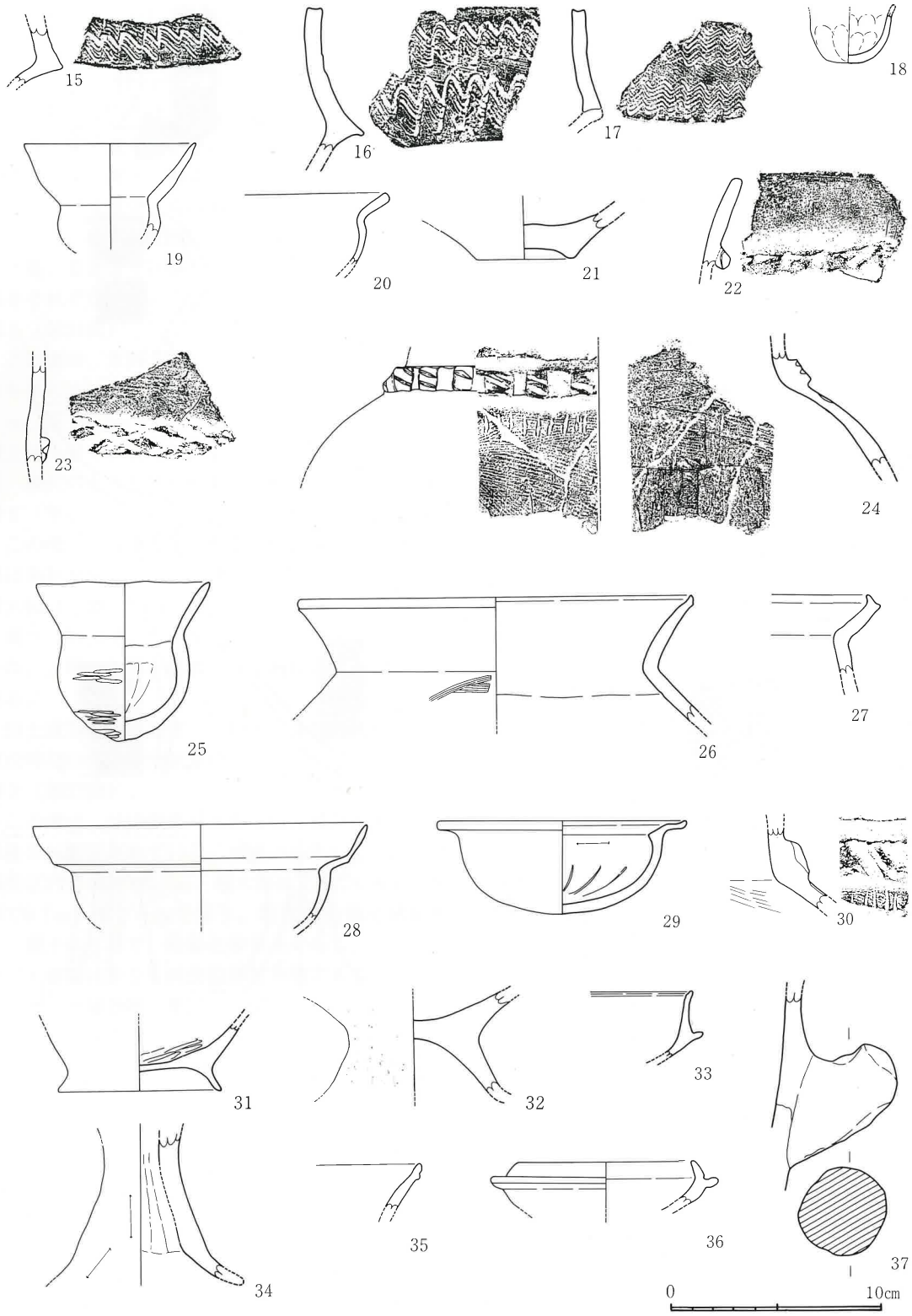
第17図　甲斐本Ａ区遺構配置・土層図



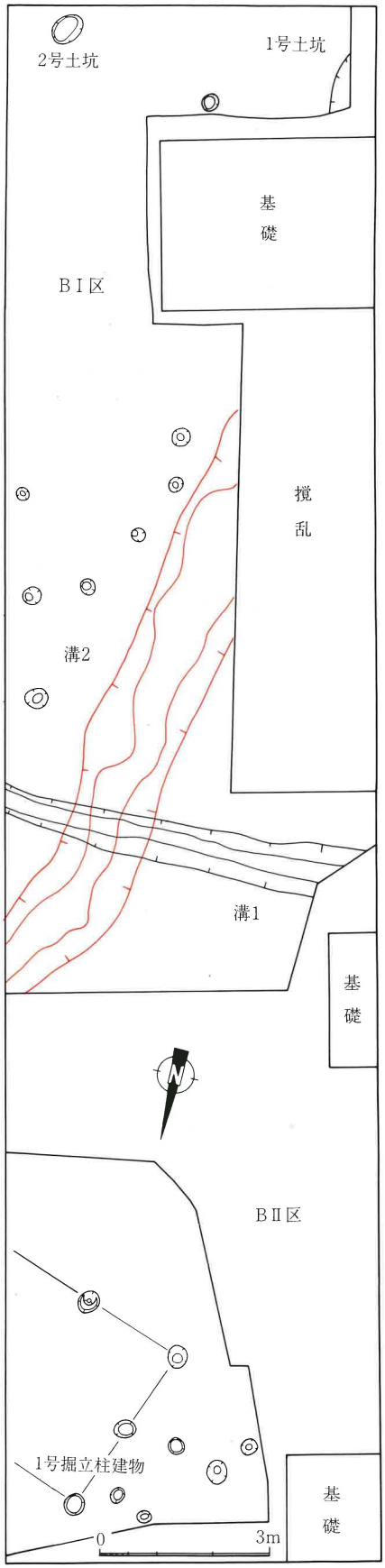
第18図　甲斐本Ａ区出土滑石製子持勾玉実測図(2／3)



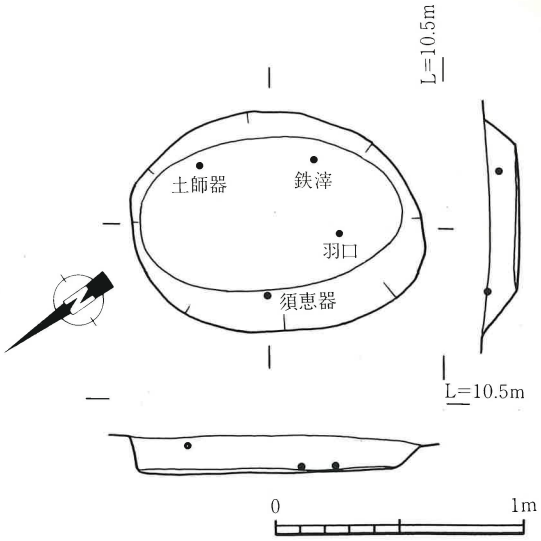
第19図　甲斐本Ａ区出土遺物実測図１（1／3）



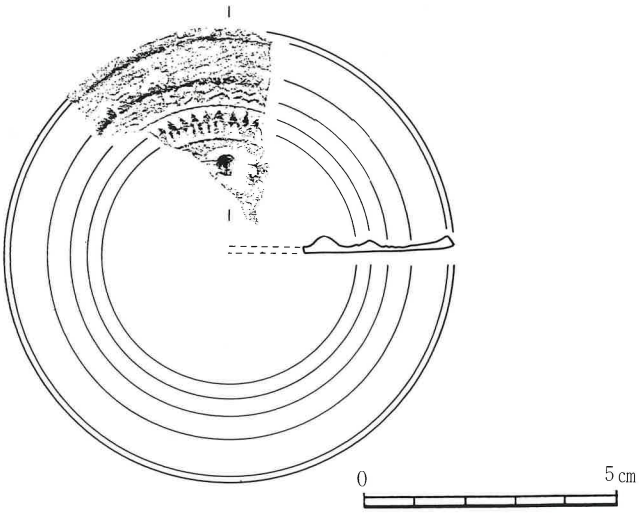
第20図　甲斐本Ａ区出土遺物実測図２（1／3）



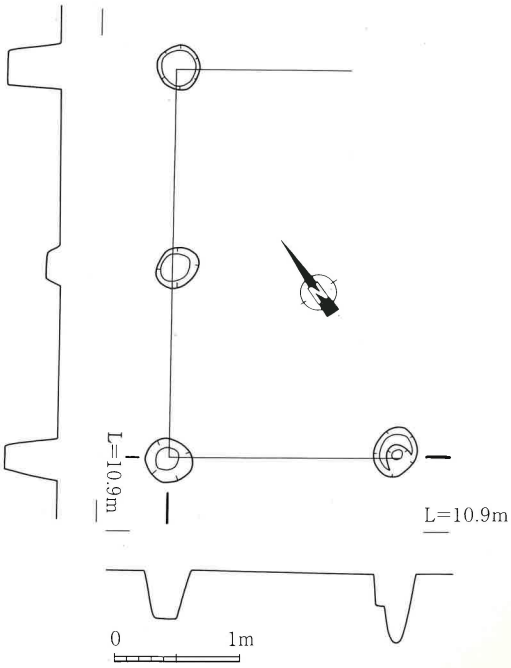
第21図　甲斐本ＢⅠ・Ⅱ区遺構配置図



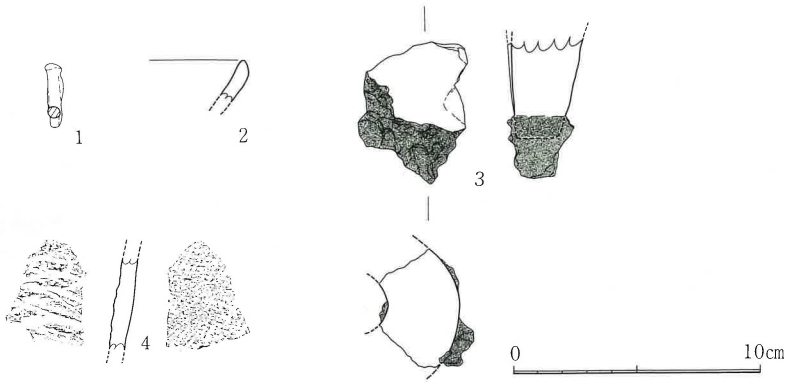
第22図　甲斐本Ｂ区２号土坑平・断面実測図（1／30）



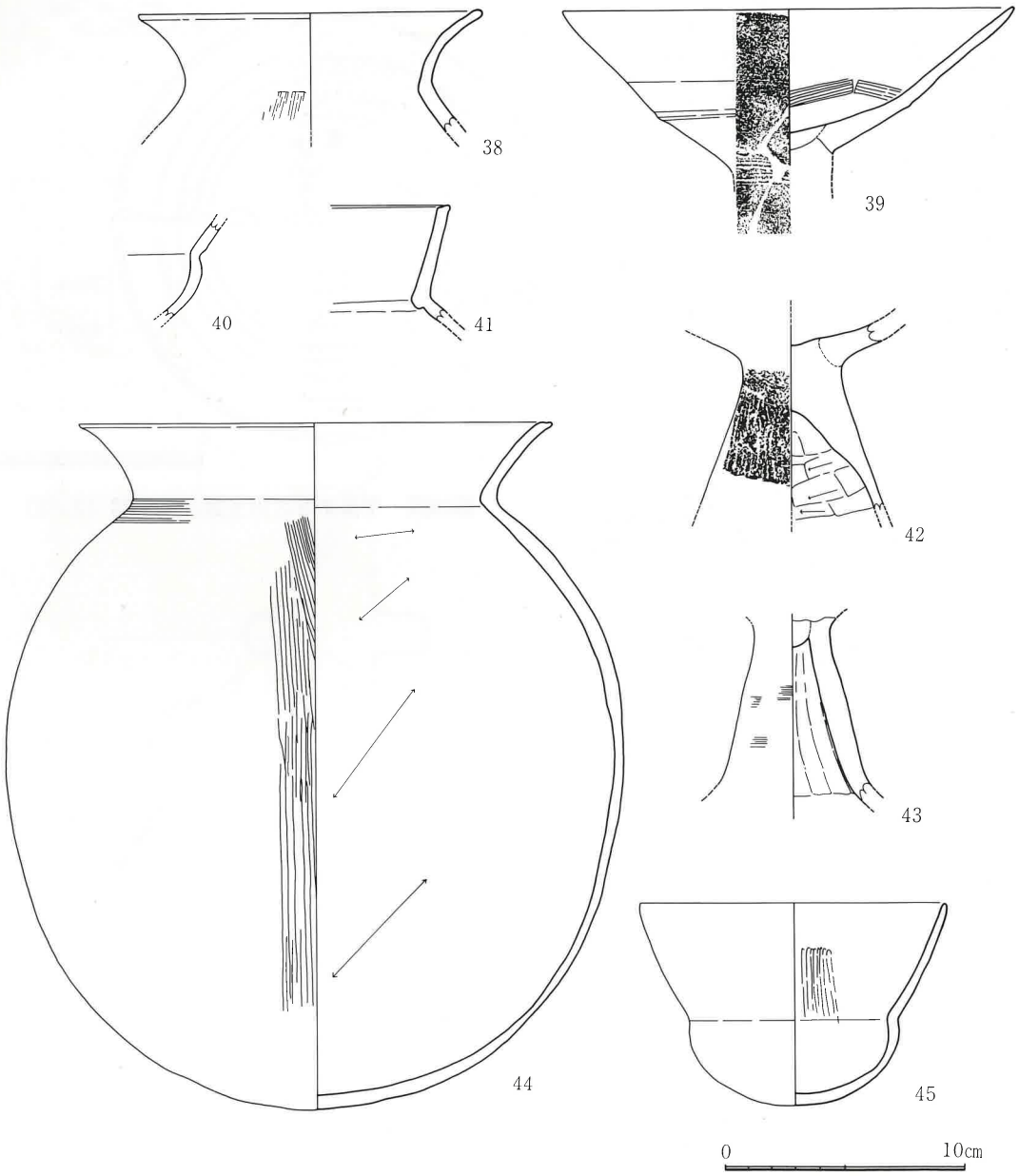
第23図　甲斐本Ｂ区出土鏡片実測図（2／3）



第24図　甲斐本Ｂ区１号掘立柱建物跡実測図（1／60）



第25図　甲斐本Ｂ区２号土坑出土遺物実測図（1／3）



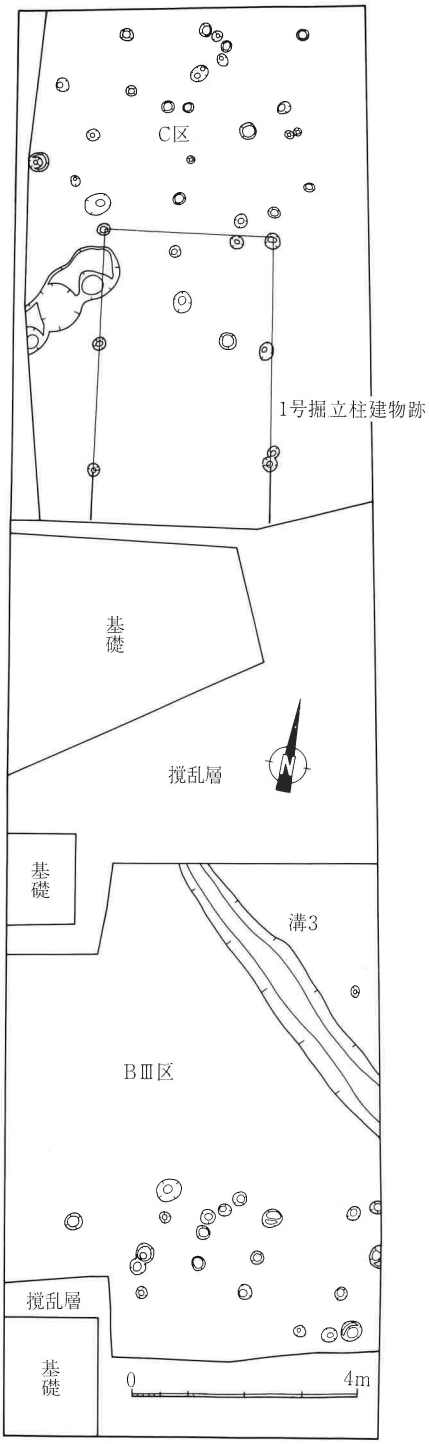
第26図　甲斐本Ａ・Ｂ区出土遺物実測図（1／3）

C区の調査

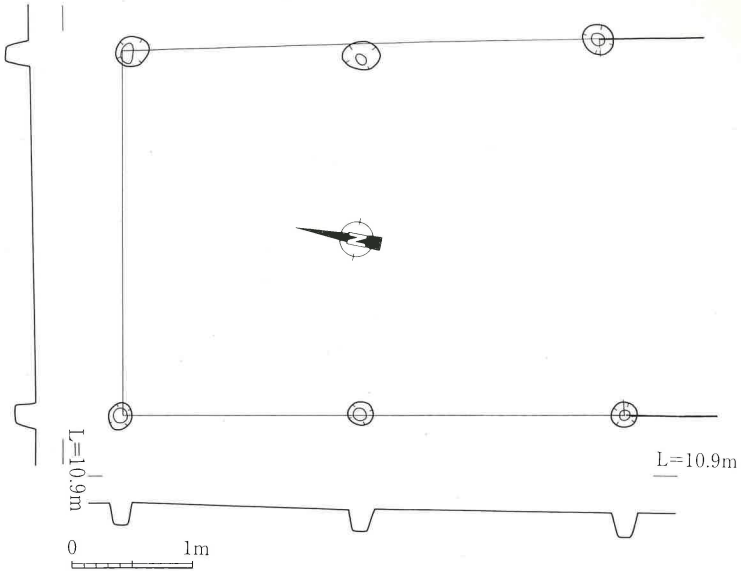
C区では、不定形土坑1基とピット38基を検出した。

1号掘立柱建物跡（第27図・第28図）

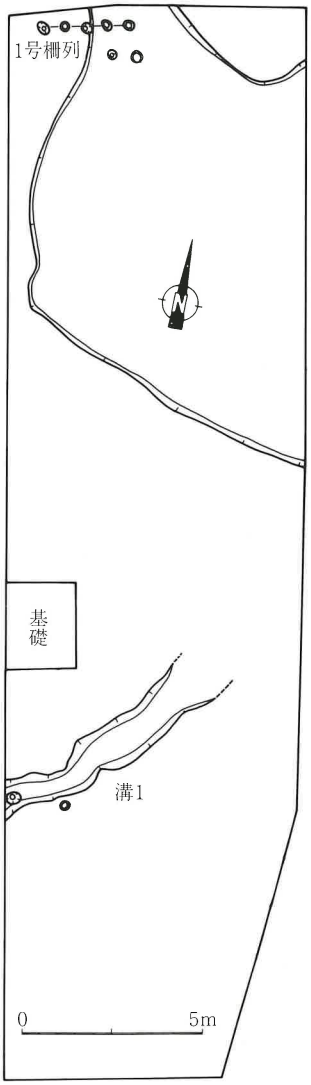
調査区のほぼ中央で検出した。南側桁行方向は後世の攪乱を受け不明である。主軸方向は、N－11°－Wで桁行2間以上、梁行1間を測る。芯々距離は、桁行で2m前後、梁行で3mを測る。



第27図　甲斐本BⅢ区・C区遺構配置図



第28図　甲斐本C区1号掘立柱建物跡実測図（1／60）



第29図　甲斐本E区遺構配置図（1／200）

D区の調査

D区では、不定形土坑１基とピット３基を検出したが、出土遺物は全くなかった。

E区の調査

E区では、１条の溝と柱穴９基を検出した。なお、調査区北側は自然の小沼状の落ち込みが認められ、ここでは多量の遺物を検出した。これらはすべて２次的に流れ込んだものと判断した。

溝１（第29図）

この溝は、南～北方向に緩やかに下がるもので後世の削平が著しく北側は土層でのみ確認した。規模は濠状を呈しているが、掘り方はあまり明確でない。調査区内での長さ7.5ｍ、最大幅は上面で1.8ｍ、底面で1.5ｍ、深さ８㎝を測り、断面逆台形を呈している。覆土は２層に分かれ、上層は暗灰褐色砂質土、下層は青灰色粘質土である。出土遺物は須恵器坏蓋、土師器直口坩などで、埋没時期は７世紀中頃前後である。

柱穴群（第29図）

柱穴群は、調査区の北側に７基検出し、東西方向に現存長2.7ｍの柵列状（１号柵列）を呈している。

F区の調査

F区では、１条の溝を検出した。

溝１（第31図）

この溝は、南西～北東方向に緩やかに下がるもので、規模は濠状を呈している。調査区内での長さ９ｍ、最大幅2.2ｍ、深さ0.4ｍを測り、断面逆台形を呈している。覆土は東側で２層に分かれ、上層は鉄分の沈殿を多く含む暗褐色土で、下層は暗青灰色粘質土である。この堆積状況から本溝は水が流れていなかったと推定される。出土遺物は、上層から出土した祭祀用のミニチュアの土人形および須恵器平瓶口縁部が出土しており、時期は６世紀末から７世紀初頭前後であろう。

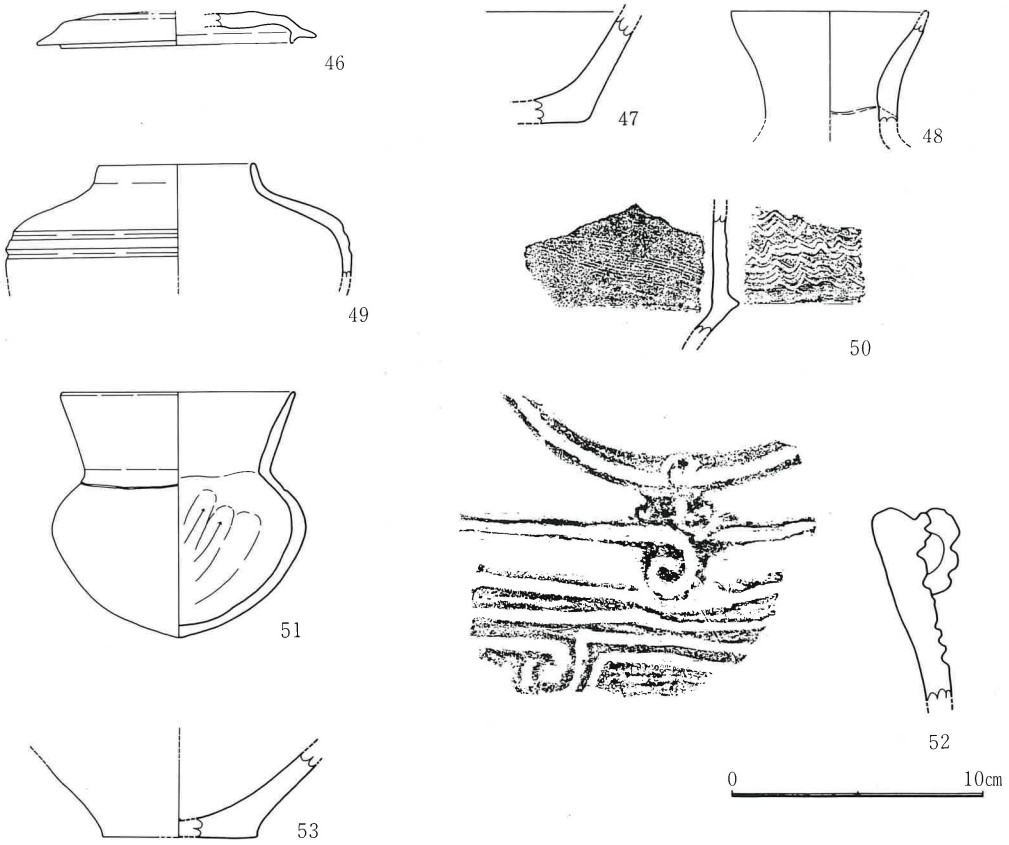
４．小結

甲斐本地区の調査では、遺構として古墳時代の溝及び土坑を検出した。古墳時代の溝は、４世紀中ごろ前後のものが１条、４世紀末～５世紀中頃のものが２条、６世紀後半～７世紀中頃のものが３条と計６条を検出した。これらの溝は、基本的には東西方向に走るもので５世紀以前の溝は水田の用排水路として機能していたと推定されるが、６世紀後半～７世紀中頃のものについてはほぼ同時期に甲斐本地区に隣接して評衙と推定されている羽屋・井戸遺跡があるところからこの地割に基づくものである可能性もある。このことは、F区溝１より出土した土人形からも推定される。

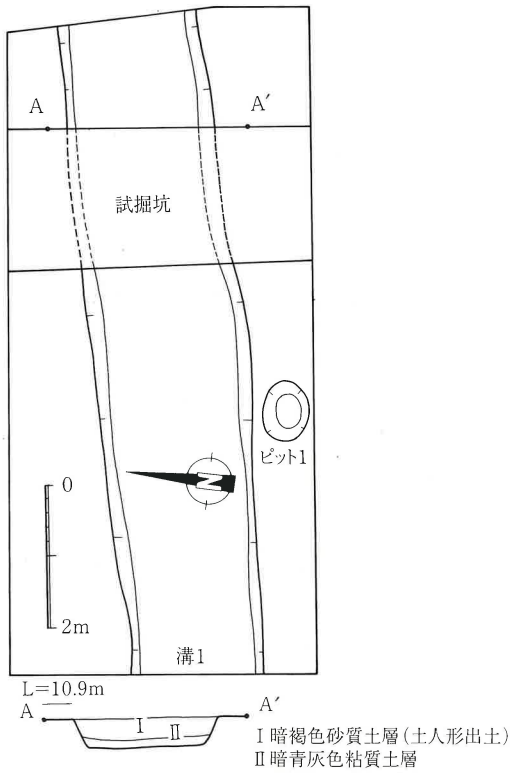
土坑は、B区より２基検出されている。特に２号からは、鉄滓、フイゴ羽口と共に鉄製品（鉄素材か？）が出土しており、周辺に７世紀前半前後の鍛冶製鉄遺構があった可能性が高く、評衙推定地との関係も注目される。

次に、発掘調査区内における生活痕は、遺物より推定すると縄文時代後期前葉から認められる。このような現象は大分川下流域の自然堤防上におしなべて見られるものの先駆け的なもので、その後後期後半～晩期末までに土毛地区、上芦原地区へと広がっていくのが特徴である。これは、いわゆる桑飼下型経済類型と呼ばれる根茎栽培を行うのに適した土地の開発が行われた結果と推定されている。

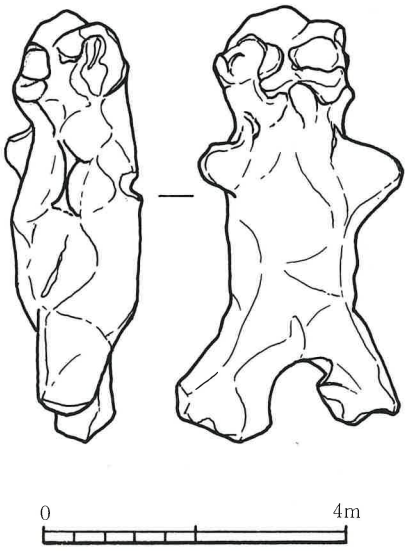
なお、A区包含層中からは、県内唯一の例である滑石製子持勾玉が、B区包含層中より仿製乳文鏡片がそれぞれ出土しており、これらは地霊祭祀にかかわるものと考えられる。



第30図　甲斐本Ｅ・Ｆ区出土遺物実測図（1／3）



第31図　甲斐本Ｆ区平面図・溝１土層図（1／100）



第32図　甲斐本Ｆ区溝１出土土人形実測図（実大）

第５表　甲斐本地区出土土器観察表(1)

No.	出土位置 遺構	種別	器種	規格( )つきは復元径・単位(cm) 器高	口径	底径	胎　土	調　整 内面	外面	焼成	色　調 内面	外面	断面	使用痕	備考
1	A区 溝１	須恵器	坏	4.5 ＋α	(10.5)		石英砂粒目立つ	ヨコナデ 不定方向 ナデ	ヨコナデ 連続回転 ヘラケズリ	良好 硬質	灰色 (HueN6/) にぶい橙色	自然釉付着・オリーブ灰 (Hue2.5GＹ5／1)			
2	A区 溝１	土師器	広口坩	4＋α	(7.5)		角閃石粒を含むが精緻			良好	灰白色 (Hue5YR7/3~7/4)	灰白色 (Hue5ＹR7／3～7／4)			口縁部～胴部
3	A区 溝１	土師器	高坏				角閃石を多く含む	ハケ しぼり痕	ハケメ	良好	暗赤灰色 (Hue10R3/1)	赤褐色 (Hue10R5／4)			脚部
4	A区 溝２	土師器	甕	15＋ α	(15.5)		角閃石が目立つ中に２～３粒の雲母が認められる	荒ヨコナデ 指オサエ・ ナデ？	表面磨滅	良好 硬質	淡橙色				口縁部～胴部
5	A区 溝２	土師器	甕				雲母粒が若干含まれる	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ナデ	良好	橙色(Hue2.5ＹR7／6)				口縁部
6	A区 溝２	土師器	高坏		(17.3)		角閃石を多く含むが精緻	ナデ	ヨコハケ	普通	黒色 (Hue10ＹR1.7／)		灰白色 (Hue10YR8/1)		口縁部～胴部
7	A区 溝２	土師器	甕		(13.5)		少量の石英と角閃石を多く含む	ヨコナデ ハケメ後 ナデ	ハケメ	良好	明赤褐色 (Hue2.5YR5/6) ~黒色	スス付着 の為黒色	明赤褐色		口縁部～胴部
8	A区 溝３	土師器	高坏				石英、角閃石を含むが精緻	荒いハケメ	ナデ	良好	淡黄色（Hue2.5Y8／3）				口縁部
9	A区 溝１	土師器	甕				雲母粒を含むが精緻				灰白色 (Hue)	灰白色を基調とするがススが付着しているため黒色を呈す			口縁部
10	A区 溝２	土師器	高坏				角閃石、赤色砂粒を含む	しぼり痕 ナデ	指オサエ	良好	灰白色（Hue10ＹR8／1）				口縁部
11	A区 溝２	土師器	高坏				角閃石、雲母、赤色粒含むが精緻	ヘラミガキ		良好	浅黄橙色（Hur7.5ＹR8／3）				脚部
12	A区 溝２	土師器	直口壺	9.8	(8.3)		角閃石を若干含むが精緻	全体に鉄分が付着しているため調整不明		良好 硬質	灰白～浅黄橙色 （Hue7.5ＹR8／2～8／4）				完形 胴部最大径(9.8cm)・外面胴部に黒斑有り
13	A区 溝３	土師器	小壺		(10.8)		角閃石、雲母粒を含むが精緻	ヨコナデ・ナデ		良好	灰白色（Hue7.5ＹR8／2）				口縁部～胴部
14	A区 溝２	土師器	高坏			16	角閃石粒を含むが精緻	シボリ痕 ヨコナデ	縦ハケ後 ナデ・ナデ	良好	灰色～淡橙色 （Hur5ＹR8／1～8／4）				脚部
15	A区 溝３	弥生 土器	壺				角閃石を含むが精緻	ヘラミガキ	ヨコナデ	良好	浅黄橙色 (Hue7.5YR8/3)	浅黄橙色 (Hue7.5ＹR8／4)			口縁部
16	A区 溝３	〃	壺				３mm大の石英粒少量と角閃石を含む	荒いハケメ	櫛描波状文	良好	褐灰色 (Hue10YR4/1)	浅黄橙色 (Hue10ＹR8／4) 部分的に褐灰色	褐灰色 (Hue10YR4/1)		口縁部
17	A区 一括	〃	壺				角閃石、石英粒を含むが精緻	ヨコハケ	櫛描波状文	良好	淡橙色(Hue7.5ＹR8／4)				口縁部
18	A区 溝２	ミニチュア土器	椀				角閃石、赤色石粒を含むがおおむね精緻	指オサエ	指ナデ	良好	黒色(Hue N21)				口縁部～胴部
19	A区 溝２	土師器	小型丸底坩		(8.0)		角閃石を含むが精緻	ヨコナデ	鉄分付着で調整不明	良好	橙色(Hue725ＹR7／8)				口縁部～胴部
20	A区 溝３	土師器	椀				角閃石、石英砂粒が目立つ	調整不明			灰白色				底部
21	A区 溝１	縄文 土器	鉢 底部			4.5	角閃石粒を多量に含む	ナデ	ヘラミガキ	良好 硬質	黒色	淡赤橙色			底部
22	A区 溝３	弥生 土器	甕				精緻			良好 硬質	浅黄褐色				口縁部
23	A区 溝３	〃	壺				石英、角閃石粒が目立つ			良好	灰白色 (Hue7.5YR8/2)	黒色 (Hue N1.5/)	灰白色 (Hue7.5YR8/2)		胴部片
24	A区 一括	〃	壺				石英、角閃石を含む			良好	淡赤橙色	赤黒色	淡赤橙色		胴部
25	A区 一括	土師器	直口壺	7.3	(8.2)		角閃石、石英粒が目立つ	ヨコナデ 指による不定方向ナデ	叩き調整後ナデ？	良好	にぶい橙色 (Hu2.5YR6/4)	橙色 (Hue2.5YR7/8)			外底面に黒斑点あり
26	A区 一括	弥生 土器	壺		(18.5)		角閃石、石英粒とともに若干の雲母粒含む	ヨコハケ	ヨコナデ ナデ	良好	浅黄橙色(Hue7.5ＹR8／3)				口縁部
27	A区 一括	弥生 土器	壺				角閃石粒を多量に含む	全体に磨滅しており調整不明		良好	黒色	にぶい橙色 (Hue7.5ＹR7／3)			口縁部
28	A区 一括	土師器	鉢		(15.5)		角閃石、石英粒を含む	回転 ヨコナデ	ナデ	良好 硬質	橙色				口縁部～胴部
29	A区 一括	土師器	鉢	4.3	11.7		角閃石、石英小粒を多く含む	ヘラミガキ・ 一部赤色化粧土有	調整不明	良好	一部 (Hue2.5YR7/8)	6／8～ 浅黄橙色(Hue7.5ＹR)			完形

第６表　甲斐本地区出土土器観察表(2)

No.	出土位置 遺構	種別	器種	規格( )つきは復元径・単位(cm) 器高	口径	底径	胎　土	調　整 内面	外面	焼成	色　調 内面	外面	断面	使用痕	備考
30	A区 一括	土師器	壺				角閃石、石英粒が目立つ	ナデ・縦方向ハケ		良好 硬質	にぶい橙色 (Hue2.5YR6/4)	橙色（Hue2.5YR7／8）			頸部
31	A区 水田層	内黒 土師器	椀			(高台) (7.8)	角閃石粒が目立つ	調整不明		普通	淡黄褐色				底部
32	A区 一括	弥生 土器	器台？				角閃石粒を多く含む	ヨコナデ	ナデ？	良好	赤色		灰色		
33	A区 一括	須恵器	坏身				石英微砂粒含むが精緻	調整不明		良好 硬質	青灰色				口縁部
34	A区 一括	土師器	高坏				角閃石、石英微砂粒を多く含む	しぼり痕・ナデ	ヘラミガキ	良好	赤褐色 (Hue10R5/4)	灰白色（Hue10YR8／1）			脚部
35	A区 水田層	須恵器	甕				精緻である			良好	灰白色（HueN7／）				口縁部
36	A区 1層	須恵器	坏身		(8.3)		精緻である	調整不明		良好	灰色（HueN7／）				口縁部
37	A区 2層	土師器	甑				角閃石粒を多量に含むが精緻			良好 硬質	灰白色（Hue7.5YR8／2）				把手
38	A区 溝1	土師器	甕		(14.0)		角閃石粒と少量の雲母粒を含むが精緻	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケメ	良好	にぶい黄橙色				
39	A区 溝2	土師器	高坏		18.5		角閃石粒を含むが精緻		ヨコナデ・調整不明	良好	浅黄橙色（Hue10YR8／3）内面に黒斑有				内外面とも部分的に赤色顔料の付着した部分有
40	B区 溝2	土師器	小型丸底坩				角閃石粒を含むが精緻			良好	灰色～淡橙色(Hue7.5YR8/2Hue6YR8/3 8/4)				胴部
41	A区 溝2	土師器	直口壺				角閃石、石英砂粒を含む	調整不明		良好	にぶい褐色（Hue7.5YR5／4）				口縁部
42	A区 一括	土師器	高坏					しぼり後ナデ・横方向ヘラケズリ							脚部
43	A区 溝2	土師器	高坏				角閃石粒含むが精緻	しぼり痕	ヨコナデ後ミガキ	良好	灰白色 (Hur2.5YR8／1～8／2)		灰色 (Hur5YR5/1)		脚部
44	B区 溝2	土師器	甕	28.5	19.5		角閃石、石英微砂粒を含む	ヘラケズリ・ナデ	ハケメ・ナデ	良好	橙色				胴部下半から底部上半はベルト状にススが付着、底部は赤変している
45	B区 溝2	土師器	小型丸底坩	8.5	(12.3)		角閃石を含むが精緻			良好 硬質	灰白色				完形・胴部最大径（7.5cm）
46	E区 溝1	須恵器	坏蓋		(9.2)		石英砂粒が目立つ	ヨコナデ・不定方向ナデ	回転ヘラケズリ		灰色（Hue4／）		灰赤色 (Hue2.5YR5/2)		
47	F区 pit1	瓦質 土器	こね鉢				精製土	調整不明		良好	晴青灰色 (Hue5PB4／1)		灰白色（Hue7／）		胴部～底部
48	F区 溝1	須恵器	平瓶？		(7.5)		石英粒含むが精緻			良好	灰白色（Hue10YR7／1）				口縁部片
49	E区 一括	須恵器	短頸壺	4.5 ＋α	(6.1)		５㎜大の大粒の石英粒を含む	回転ヨコナデ		良好 硬質	灰色（HueN4／）		灰赤色 (Hue2.5YR8/2)		
50	E区 一括	弥生 土器	壺				角閃石、赤色砂粒含むが精緻	ヨコナデ	ヨコナデ後ミガキ？	良好	灰色～浅黄橙色 (Hue7.5YR8／2～8／3)				口縁部
51	E区 溝1	土師器	直口壺	9.6	(9.1)		角閃石、石英粒を多く含む	荒いハケ後ナデ・部分的にケズリ	ヨコナデ・ナデ	良好	灰白色 (Hue7.5YR8/2)	淡橙色 (Hue5YR8/3~8/4)	灰白色 (Hue7.5YR8/2)		完形・胴部最大径(10.0cm)・布留Ⅱ期
52	E区 表採	縄文 土器	鉢				１～２㎜大の石英・角閃石等多量に含む	横方向研磨		良好	にぶい橙色～黄橙色 (Hue7.5YR8／8～Hue5YR7／4)				口縁部
53	E区 一括	弥生 土器	壺？			(6.2)	角閃石、石英砂粒を多量に多く含む			不良	黒色	黄橙色			底部

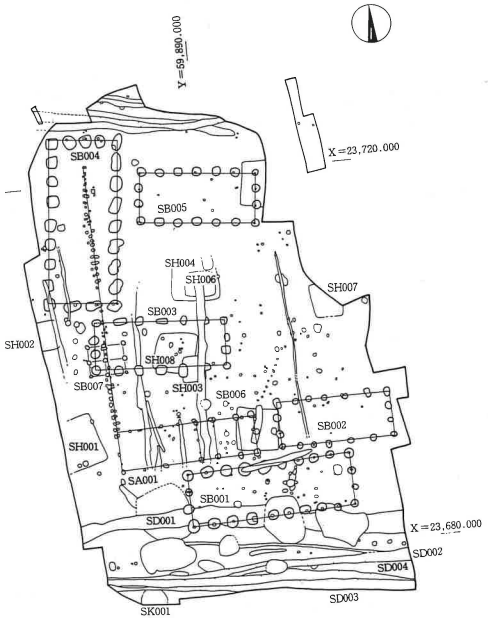
第３章　まとめ（別図１参照）

１．遺跡の性格について

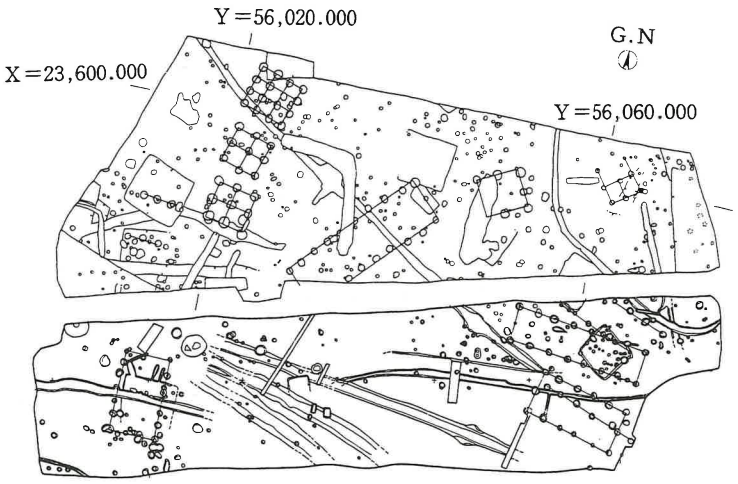
古国府遺跡群は、『和名抄』にみえる古代の荏隈郷に属すると考えられており、『弘安図田帳』には、「国領荏隈郷　百六十町　地頭職大友兵庫入道殿」とあるので鎌倉時代も国衙領であったことがわかる。さらに、古国府、羽屋地区は江戸時代より豊後国府推定地のひとつであり、以来、文献・考古・歴史地理的研究がなされてきた。

近年の古国府遺跡群の発掘調査では、大分市教育委員会が平成３年・８年に調査した羽屋・園遺跡や同８年に調査した羽屋・井戸遺跡において、７世紀前半頃の評衙関連遺構が発見されている。[註1]

そこで今回の調査では、評衙関連遺構と関わる遺構の有無を念頭において調査を行った。その結果、甲斐本地区においては重要な資料を得ることができた。**一つは６世紀後半～７世紀前半前後に形成されたＡ区包含層出土の滑石製子持勾玉である。**この種のものは九州では福岡・熊本県を中心に出土しており、佐田茂[註2]の研究では「大和政権下で統一的な祭祀儀礼に使用したもの」と考えられている。さらに、藤永正明[註3]は祭祀儀礼に使う道具の機能を『古事記』、『風土記』などの文献資料を検討し、「玉は土地の支配・保全に使用する機能を持ち境界領域に関連している」と想定している。これらを総合するとこの勾玉は６世紀後半～７世紀前半前後大和政権が関わった土地の支配保全の祭祀に関連するものと想定した場合、評衙地割に関わった可能性は大きい。また、この勾玉の出土地点は地形的にもやや高まりのある地形が落ちる地点であり、ここには３条の東西溝が近接あるいは重複してつくられていることなどからこの地点が境界的な役割をしていたと考えられる。**二つめは、Ｆ区溝１より出土した土人形でその形態は髪をミズラにたらし、足の先端部分をやや太くしているのが特徴である。**これは、大分市浜遺跡出土の土製人形にくらべ写実的なところが特徴である。このようなタイプのものは時期がずれるものの兵庫県河高・上ノ池遺跡出土の人形に近く、藤永正明[註4]は「この人形が祭主を表現したものと考え、神が活動する夜に、人の形代として使用した」可能性があると推定している。このような祭祀は奈良時代以降の律令祭祀に通じるものでもあり、地鎮具として使用されたものであろう。Ｆ区溝１は略東西方向に掘られ、埋没時期は出土須恵器から７世紀前半前後であるところからも**この溝は推定評衙造営と近い時期であり評衙地割と深い関係にあると考えられよ**



第33図　羽屋・井戸遺跡遺構配置図(註１より転写)



第34図　羽屋・園遺跡遺構配置図(註１より転写)

う。さらにＢ区２号土坑は鍛冶関連のものであり、これも共伴土器から６世紀後半～７世紀初頭前後に比定され推定評衙との関係も無視できない。

以上、甲斐本地区では推定評衙に関連すると思われる遺構・遺物を発見した。今回の調査では、これらとは別に縄文時代から弥生時代の生活・生産関連の遺構・遺物を発見した。

縄文時代は上芦原、土毛、甲斐本各地区で後期前半～晩期後半にかけての土器、石器を検出した。このような現象は大分川下流域では、多くの微高地で見られ前述した桑飼下型経済類型と呼ばれる根茎栽培を行うのに適した土地の開発が行われた結果と思われる。

弥生時代は中期中頃に土毛地区で溝が検出され、この時期に本格的な水稲栽培が行われた可能性は高い。但し、上芦原、土毛地区はプラント・オパール調査結果では、沼地と湿原地帯であったことが明らかになっており、土毛地区では沼地に遊んだ弥生時代人の足跡が検出されている。ついで弥生時代終末期から古墳時代初頭には土毛、甲斐本地区に溝が検出された。甲斐本地区の溝はその規模が大型になる。これは水田開発の大規模化に起因するものであろうか。さらに、４世紀末～５世紀中頃には甲斐本地区に集中して大型溝が検出された。甲斐本地区は微高地上にありここにのみ水田水路が認められると言うことは低地全体の水掛かりに有効であることから水田開発の拡大を示している。以上のことは、プラントオパール分析結果からも肯定される。

古墳時代後期には、乳文鏡が出土している。これは、破鏡で全体の約６分の１が残っている。（第23図）復元面径8.8cmを測る。縁は、若干反り上がり、断面が斜縁を呈し、外区は縁側から鋸歯文帯・複線波文帯をそれぞれ巡らしている。内区とは一条の圏線で区別する。内区は凸帯（断面三角形）の外側に鋸歯文、内側に櫛歯文を配している。さらに、その内側には圏線を巡らし、径４mmの乳文を配している。紐等は不明である。

この破鏡の性格としては、荒ぶる土地神に対しての祭祀儀礼（地鎮具）に使用したものであろうか。

２．今後の課題（別図参照）

今回の調査では、推定評衙造営と近い時期の種々の祭祀遺物および東西方向に延びる区画溝を検出した。これは、評衙造営に関わる祭祀儀礼を考える一例として今後重要となろう。しかしながら調査区が限られていたためにこれを確実に実証するまでにはいたらなかった。羽屋・井戸遺跡の建物群を中心に見た場合、東西を区画する南北溝の確認が必要になり、**条里地割を参考にすると西側が南大分中学校校庭付近、東側は字七會子付近が重要になろう。**

平成８年に本遺跡の北側を東西にのびる上野台地において国府関連遺跡である竜王畑遺跡[註5]が確認されており、**この一帯は豊後国府の実体解明および大分君一族に関わる居館関連の遺跡を追求するうえで重要な地域であることが明らかになった。**

註１　「豊後国府推定地周辺の発掘調査Ⅱ」坪根・塩地『大分県地方史』163号　1996年

註２　「九州の祭祀遺跡』佐田茂『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会編　1975年

註３　「まつりの伝承」藤原正明『まつるかたち－古墳・飛鳥の人と神』近つ飛鳥博物館　1997年

註４　註３に同じ

註５　1997年　大分県教育委員会調査

附論　大分市羽屋周辺の水田開発時期

国道210号線改良工事に伴う発掘調査区土壌のプラント・オパール分析から

大分短期大学助教授　佐々木　章

はじめに

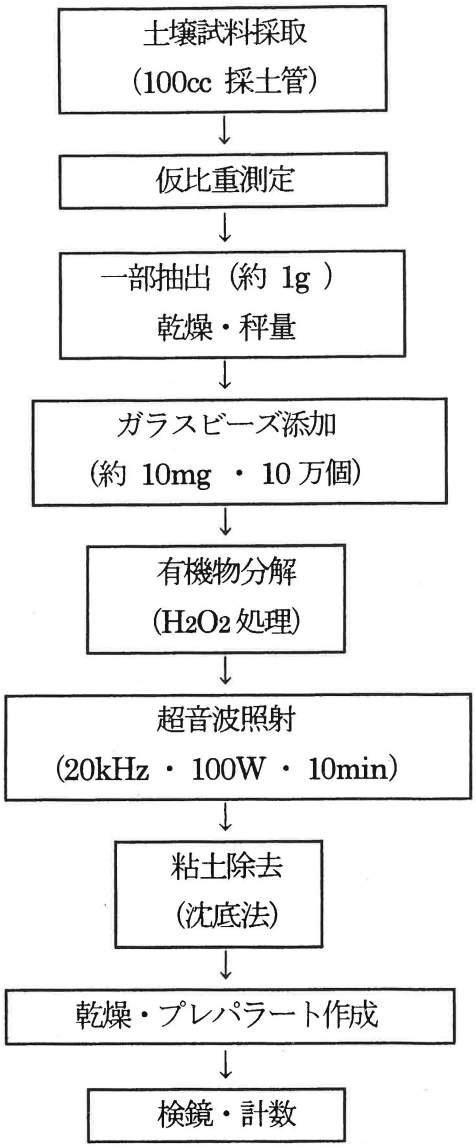
大分市羽屋地区は、豊後国府所在地の有力な候補地の一つである古国府地区の西端にあたっている。また、古来、日田・福岡方面、阿蘇・熊本方面への交通の要所にもなっている。

プラント・オパールは、イネ科植物の機動細胞をはじめとする諸細胞、カヤツリグサ科・イグサ科などの草本植物のほか、一部の樹木植物が体内に沈積した珪酸体が、土中にとどまったもので、広い意味での植物化石である。特にイネ科植物の機動細胞プラント・オパールは、イネをはじめとする穀類、草原を構成するススキ類、タケ・ササ類、湿生のヨシ属などの植生を良く反映している。さらにプラント・オパールが全て土壌中に残っていると仮定できる場合には、現生植物中の珪化機動細胞密度を使って過去のイネ科植生やイネ科作物の生産量を推定することもできる。

国道210号線工事に伴なう発掘調査で検出された一連の土壌のプラント・オパール分析の機会が与えられたので、分析結果をもとに、羽屋地区における水田開発の時期について検討したい。

分析方法

甲斐本地区の南部では、東壁面で埋没水田堆積と考えられる断面が観察された。遺物は少ないものの、後にのべる畦畔状遺構と溝状遺構との関係から、おそらく古墳時代以降の堆積層と考えられている。東壁面の観察から、鉄の集積層を基準にすると複数の埋没水田作土があったと考えられる。最上層の作土層は発掘以前に破壊されていたが、下層土以下を地山直上まで12層に分けて採取した。なお層が厚い２層，６層，７層，８層は上下に分けて採取した。また、その北側から大畦畔と考えられる遺構が上位と下位に重なって検出され、さらに北にはそれぞれに対応すると考えられる上位と下位の溝状遺構も検出された。上位の溝状遺構は検出された遺物から７世紀前半頃、下位の溝状遺構は



第35図　プラント・オパール定量分析手順

第７表　植物体中の珪化機動細胞密度

プラント・オパール分析分類名	代表植物		植物体中密度（104個／ｇ）
イ　ネ	イ　ネ	*Oryza sativa*	3.40
ヨ シ 属	ヨ　シ	*Phragmites communis*	1.44
タケ亜科	ゴキダケ	*Pleioblastus Chino var. virides f. pumilis*	20.83
ウシクサ族	ススキ	*Miscanthus sinensis*	2.79

註※　甲斐本Ａ区・土毛地区の基本土層とプラントオパール採取土層の番号は照合しない。

4世紀から5世紀中頃と考えられている。上位の大畦畔状遺構は単一層で、下位の大畦畔状遺構は2層で構成されているように観察されたので、それぞれの層ごとに試料を採取した。また、溝状遺構はそれぞれ複数の層で埋没したように観察されたが、それぞれ最下層から採取した。溝状遺構の、さらに北に位置するE区では湿地状の堆積が検出された。古いものでは縄文時代とされる遺物を包含している。下層を上下2層に分けて採取した。

また、甲斐本地区の北に隣接する土毛地区でも、甲斐本地区E区の湿地に接続すると考えられる湿地が検出された。ここでは、湿地堆積層の比較的上部に黒色粘質土層と足跡状遺構が検出され、畦畔は検出されなかったものの水田土層の可能性が論議された。遺物は少ないが、弥生中期の遺物を含む土層との外見上の類似性や、標高の同一性から弥生中期とされている。さらに北側には、東西に走る2本の小溝が検出された。いずれも弥生中期の遺物を包含している。このうち2号溝を含む断面から土壌試料を採集した。この溝も最下層はXV層であるが、埋没した後XⅢ層で改修工事を施したように見受けられる。各層から試料を採取したが、XV層は厚いので上下に分けて採取した。

プラント・オパールの大きさは50μm程度で、肉眼では観察できない。そのため後代の撹乱や採取時の汚染（コンタミネーション）に対して細心の注意が必要である。そのため、土壌の亀裂部を避けて注意深く採取した。採取した試料は研究室に持ち帰り第35図に示す手順に従って定量分析を行った。

分析結果および考察

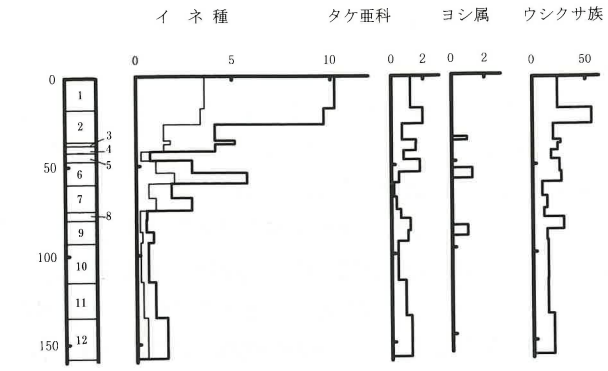
分析結果を植物体重に換算して第36図に示す。単位は広さ10a（1,000㎡）深さ1㎝の土壌中に埋没した植物の地上部乾物重（t）で示した。イネについては、生産されたであろう籾量も推定してあわせ示した（細い線）。植物体重に換算するには第7表の植物体中の珪化機動細胞密度を使った。

甲斐本地区の南部東壁面では、採取した全ての土層からイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。水田遺構が確認された多くの遺跡における作土層の分析結果では、経験的にイネ籾に換算して1（t／10a／㎝）を超えることが多い。V層を除いてⅦ層以上では、ほぼこの基準値を越えている。特にV層以上は、断面観察からも有機質による黒色の強い埋没作土層とその下に鉄を集積した褐色の犂床層が組み合わされる典型的な埋没乾田累積が認められており、乾田の作土層と犂床層と認められよう。しかし、イネ機動細胞プラント・オパール量が非常に多いことから、水田にイネの葉身が多量に供給されるような栽培様式であったと考えられる。たとえば穂刈りが長く続いたとか、株刈りであっても水田へのイナ藁堆肥施用量が多かったことが考えられよう。その下、Ⅵ～Ⅷ層になると乾田土壌の特徴は顕著ではないものの、Ⅷ層はイネ機動細胞プラント・オパールが少なく犂床層の特徴も見られるので、半湿田的な水田であったと考えられる。一方、Ⅸ層以下にもイネ機動細胞プラント・オパールが検出されるが、量がやや少ない。周辺の水田からの流れ込みの可能性もある。しかし、地山直上のXⅡ層では経験的に知られている水田作土層の値にほぼ匹敵するほど多いので、湿田に近い状態で連綿とイナ作が続けられていたことが考えられる。ヨシ属の検出がすくないことも「葦原」でなかったことを示しており、この考えの傍証となり得よう。

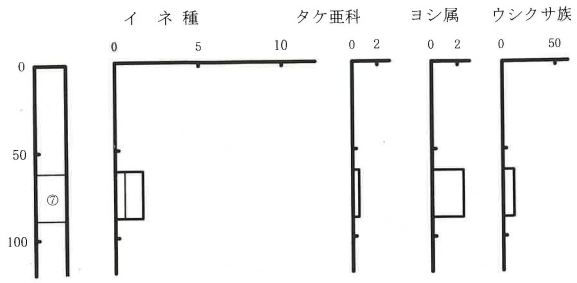
同地区で検出された、上下に重なった大畦畔状遺構を構成する土層や、それぞれに対応すると考えられる溝状遺構の埋め土からもイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。特に下位溝の分析値は特に多く。水田作土層が直接流れ込んだことが考えられる。ごく周辺に水田が広がっていたものであろう。また、縄文時代の遺物を包含する湿地でイネは全く検出されなかった。ヨシもさほど多くない。有機物の給源は他の植物であろう。

一方、土毛地区南部の分析結果では、イネ機動細胞プラント・オパールは、足跡状遺構を含む黒灰色土層を覆う黄色を帯びた粘土層以上で、少量検出されたにとどまった。分析した土層はいずれも水田とは言い難い。上層にはヨシ属は少ないが、黒灰色土層にはヨシが非常に多く、いわゆる「葦原」状であったと考えられる。これより下層でもヨシは少ない。これは甲斐本地区の湿地土壌における分析値の傾向と一致する。

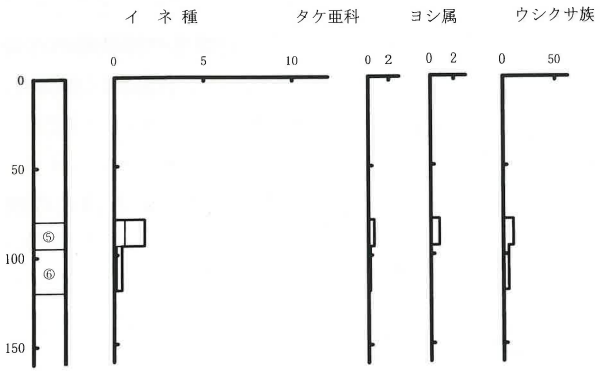
やや北側で地山に掘り込んだ溝2を検出した場所では、最近の埋土の下にある、比較的に新しい乾田土層にイネ機動細胞プラント・オパールが比較的に多かった。特筆されることは、その下に埋没した弥生中期の遺物を包含する溝中の埋土で少量ながらイネ機動細胞プラント・オパールが検出されることである。しかもこの溝は一度埋没したのをXⅢ層で改修している。XⅢ層は改修した溝の埋土層であるが、イネ機動細胞プラント・オパールも多く、溝の外にも広く分布するので、溝が機能している時期に周囲の水田作土層で埋没したと考えられる。



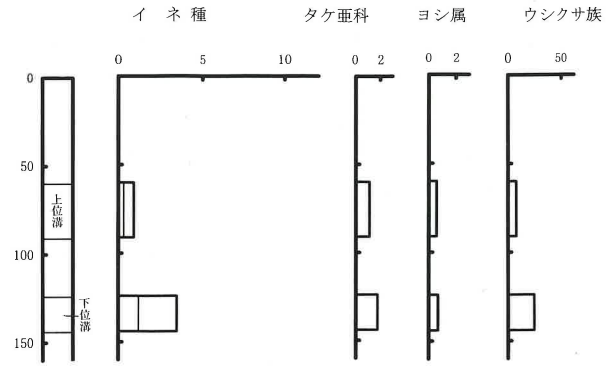
甲斐本地区南部東壁面土壌



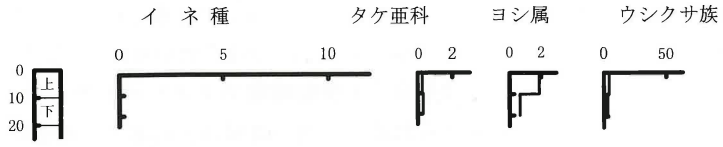
甲斐本地区上位畦畔土壌



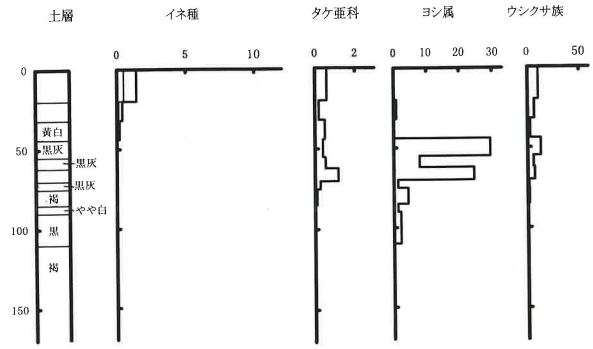
甲斐本地区下位畦畔土壌



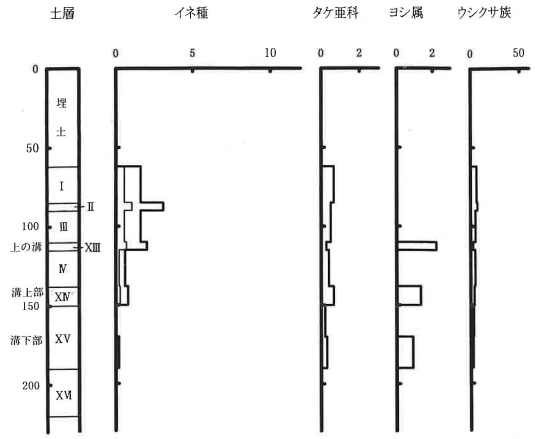
甲斐本地区上位溝、下位溝土壌



甲斐本地区Ｅ区湿地土壌



土毛地区ＡⅠ区足跡検出地点



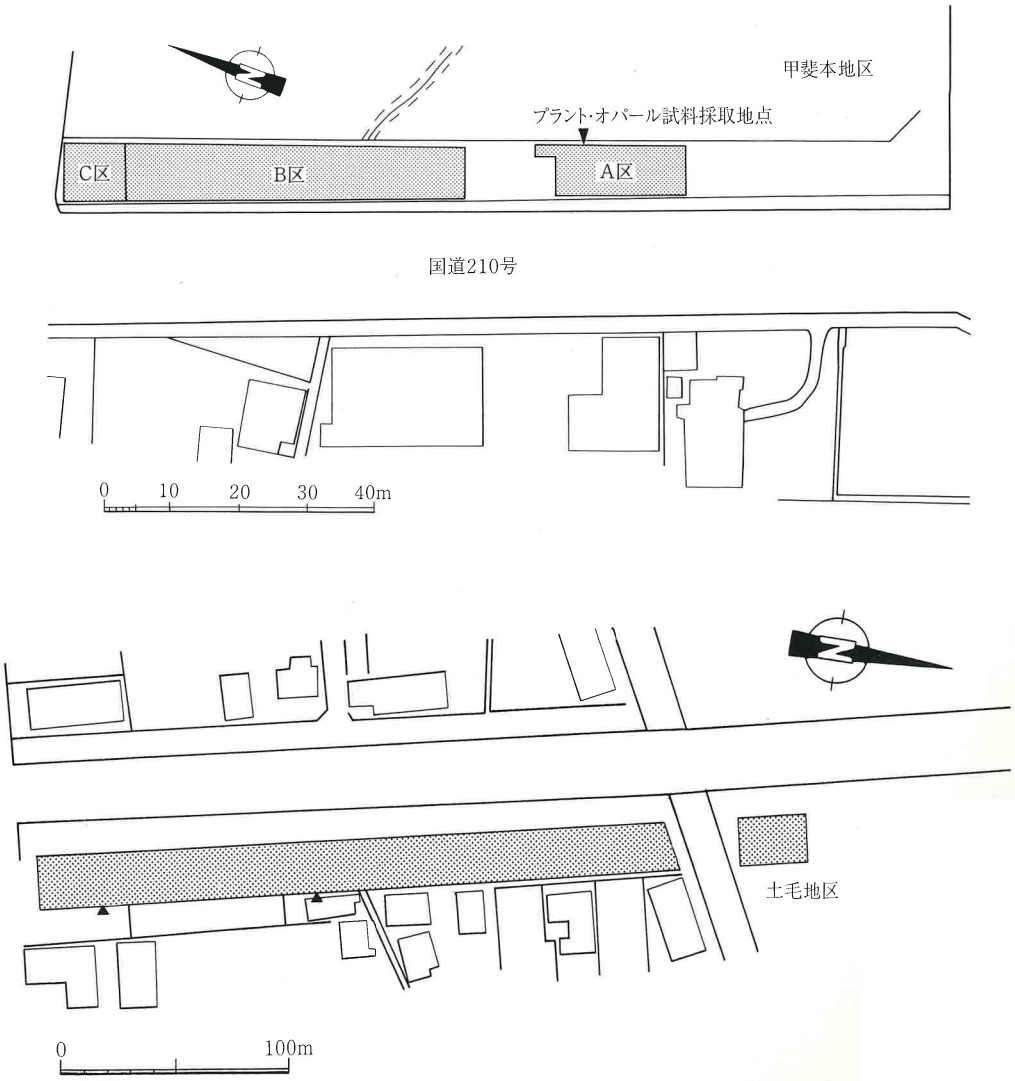
土毛地区ＡⅡ区２号溝検出地点

第36図　各検出地点のプラント・オパール密度から推定した植物量（t／10a／cm）

まとめ

以上のことから、次のような水田開発史が考えられる。南部に位置する甲斐本地区と北部に位置する土毛地区の間には湿地があったが、ヨシの生育は少なかったようである。湿地中に遺物が残ることから縄文時代以降には周囲に住居が営まれていたと考えられる。しかし、水田開発が始まったのは弥生中期のことであろう。まず、湿地の北側に2号溝などの水路が建設され水田が開発された。水路埋土中のイネ機動細胞プラント・オパールの存在は、そのことを物語っている。このころ湿地の北側は「葦原」化しており、何らかの利用をしていた。開発を前後して「葦原」が消滅する。水田開発後も何度か氾濫に見舞われ、堆積物で土地が高くなってきた。同時に溝も埋没したので、規模を縮小して改修工事を行って、イネの生産が安定してきた。しかし、地盤が高くなったためであろうか、水田以外の利用が多くなり、以後は比較的に新しい水田が営まれた。これは典型的な乾田である。

一方、湿地の南側が開発されるのは4世紀から5世紀中葉以降のようである。このころ幅数mの水路が存在しており、大畦畔の南側には湿田状態で水田が営まれたようである。もっとも、一部では大畦畔建設以前から12層を利用した湿田があった可能性がある。何度かの氾濫に見回れて土地が高くなるたびに、溝や大畦畔の再建工事を行ったようである。6世紀前期ころまであった水路も、6世紀後期から末期になると埋め立てられ、いよいよ乾田化が進行し生産性はあがった。しかし、それにしても検出されたイネ機動細胞プラント・オパール量が株刈りにしては多すぎる。穂刈から株刈りへの移行期が遅い、あるいは早くからイナ藁堆肥が施用されたなどの原因も考えられるが、結論はひかえたい。

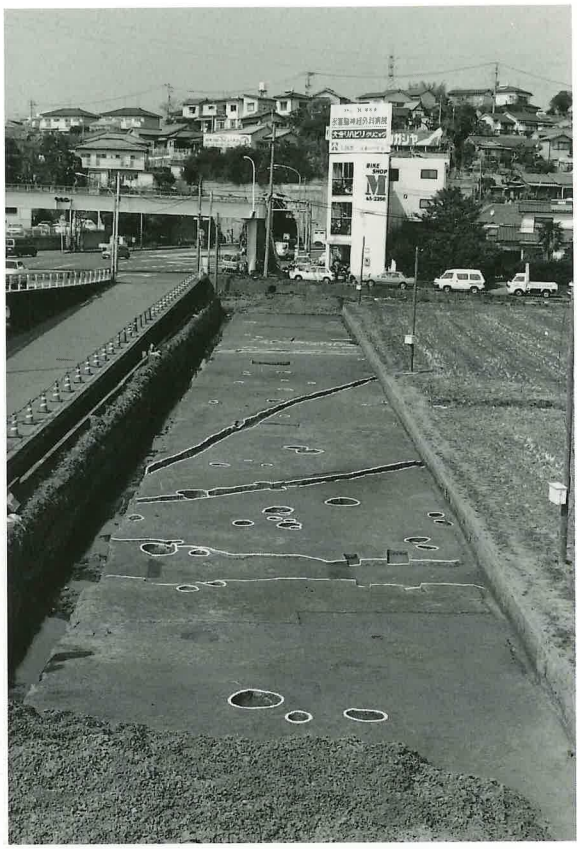


第37図　プラント・オパール分析試料採取地点位置図

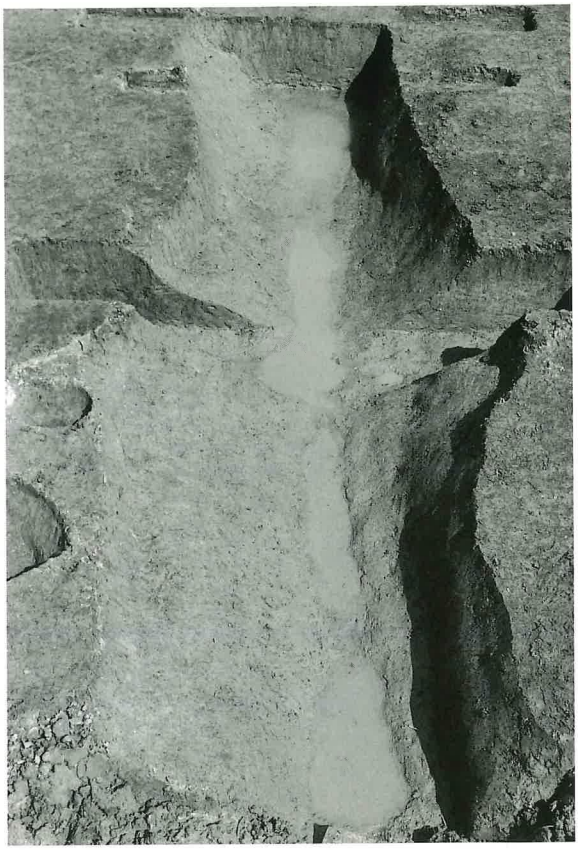
写　真　図　版

土毛地区発掘調査全景

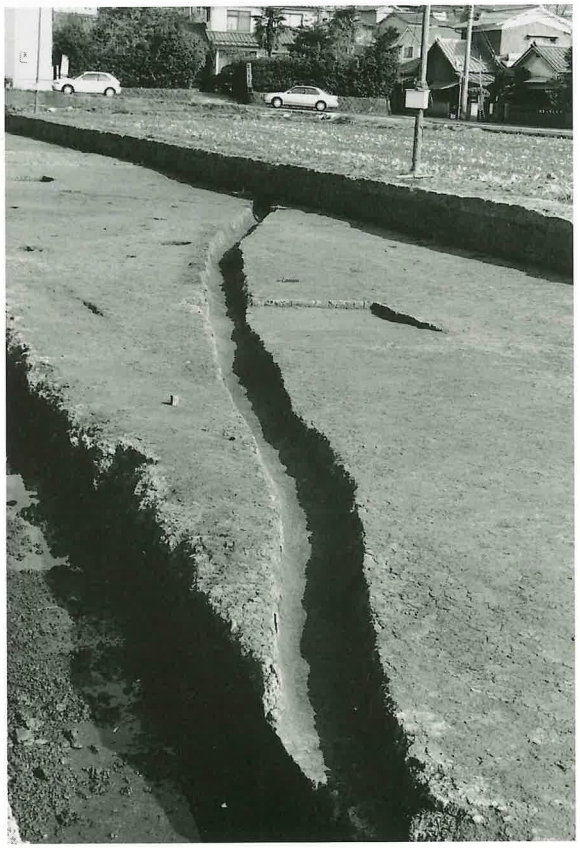
図版　1　上芦原地区



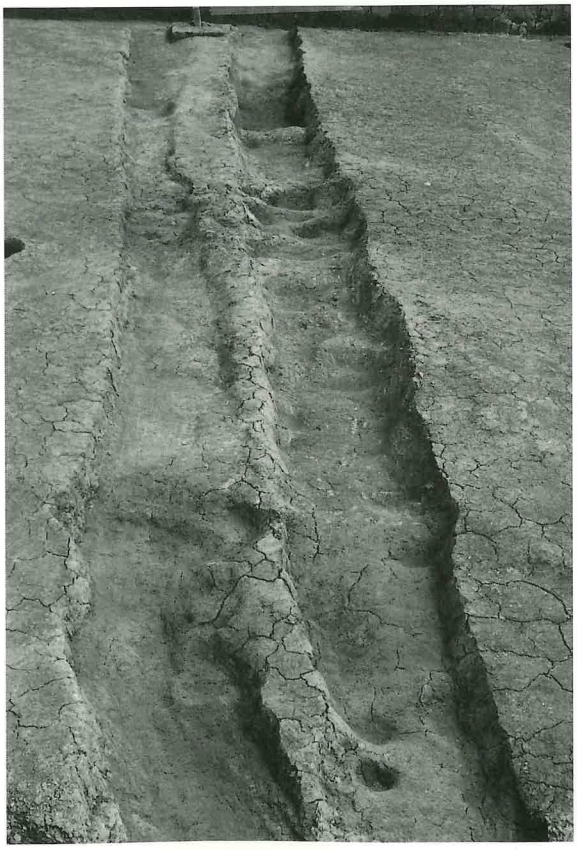
上芦原地区全景



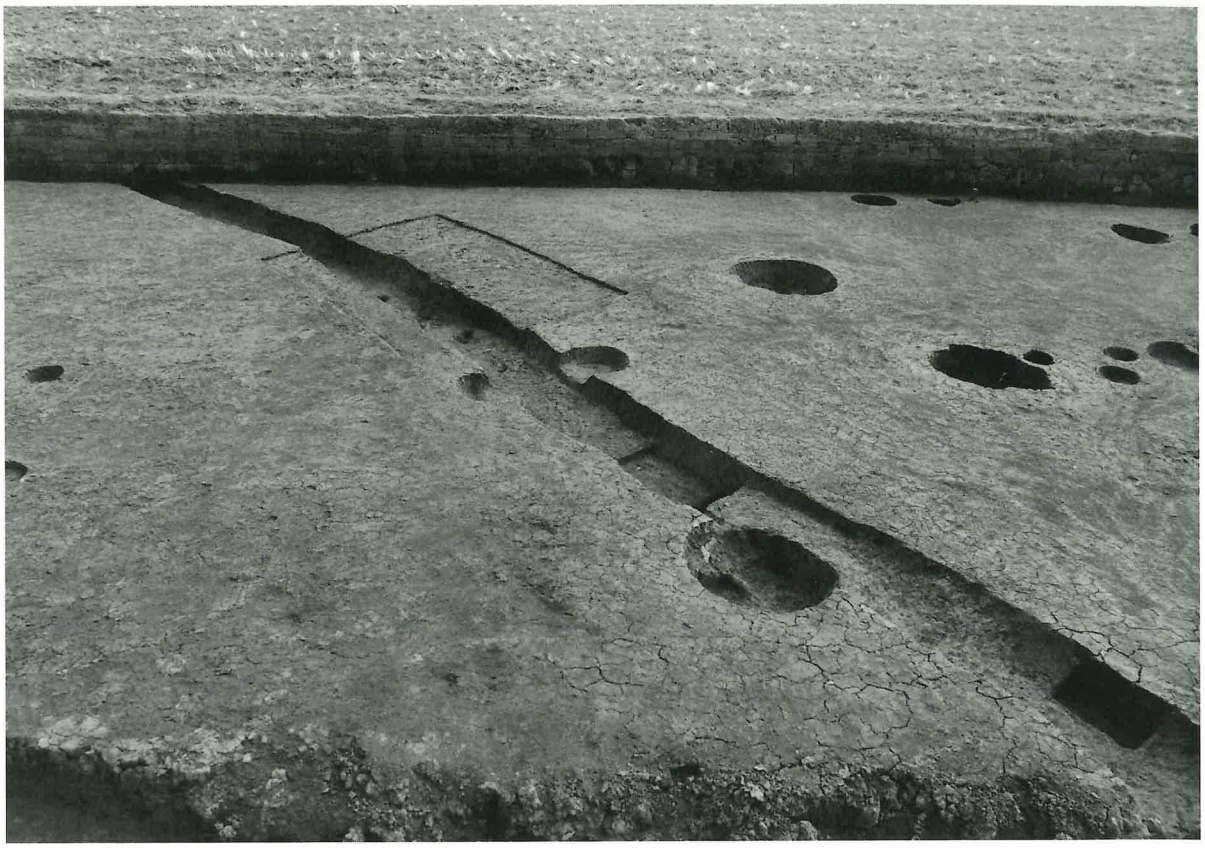
溝1　完掘状態



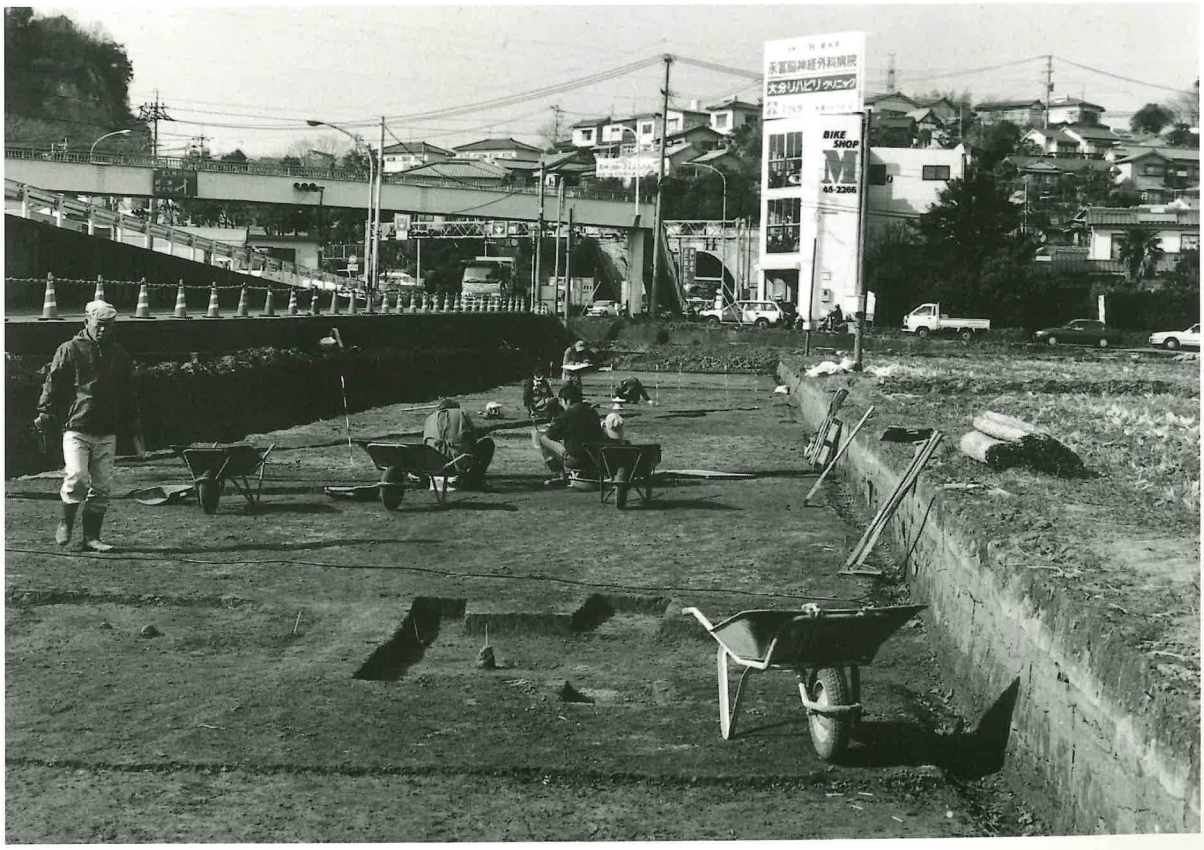
溝2　完掘状態



溝3　完掘状態



溝4　完掘状態

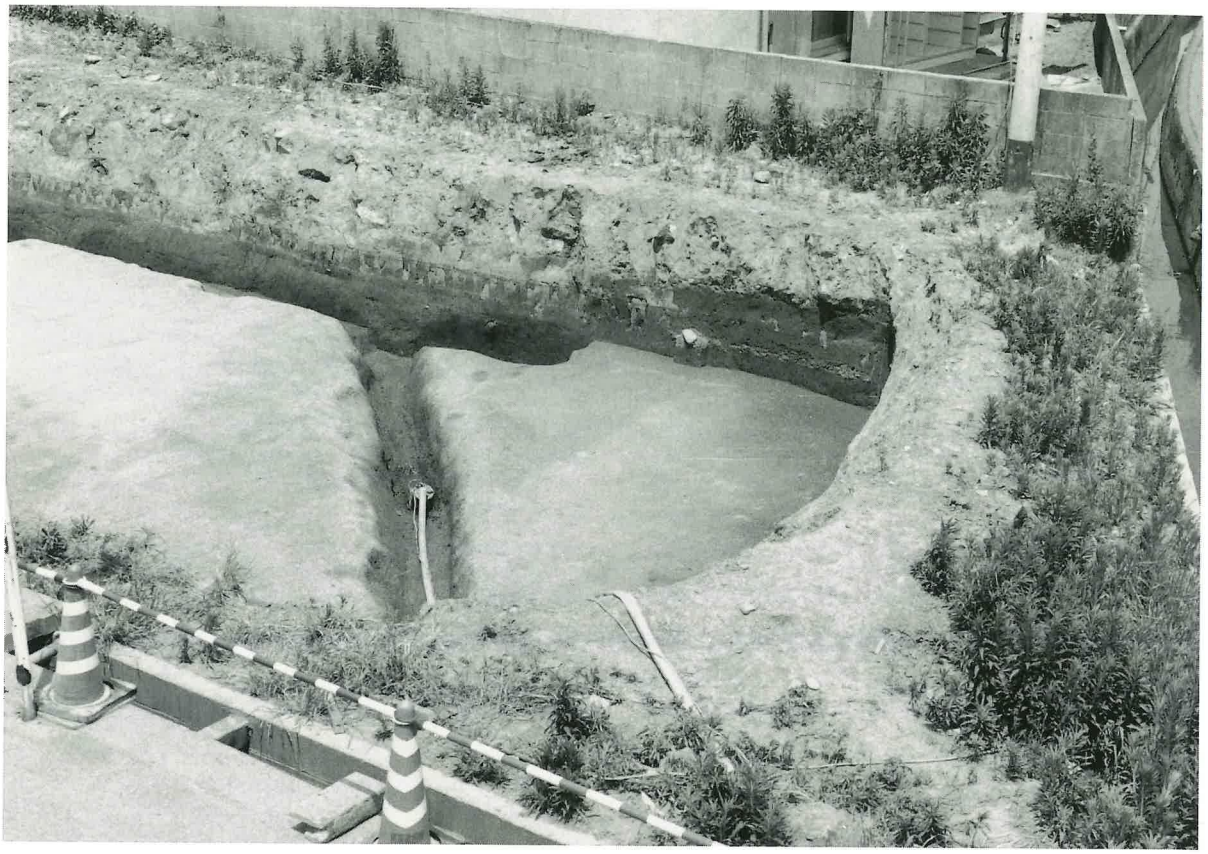


調査作業風景

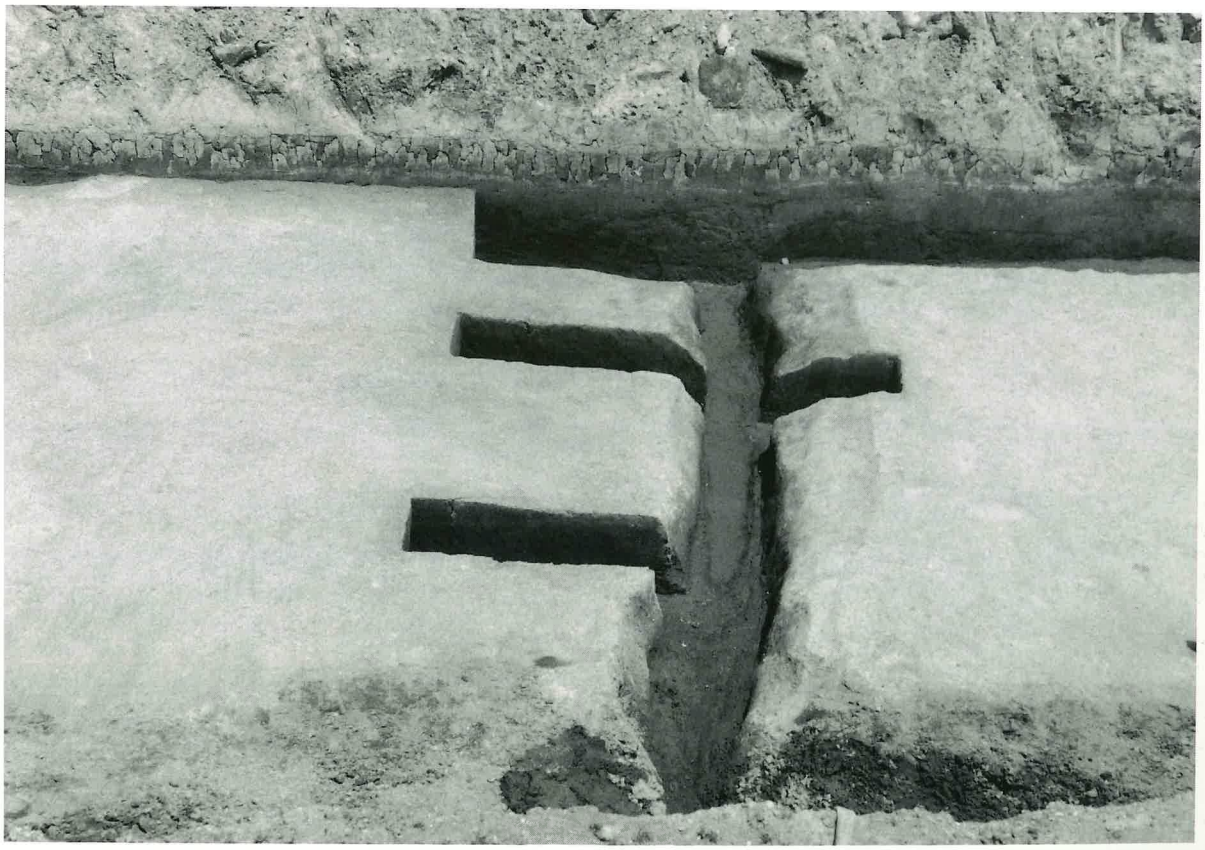
図版　3　土毛地区

ＡＩ区弥生人足跡検出状態

ＡII区遠景



AⅡ区溝1完掘状態

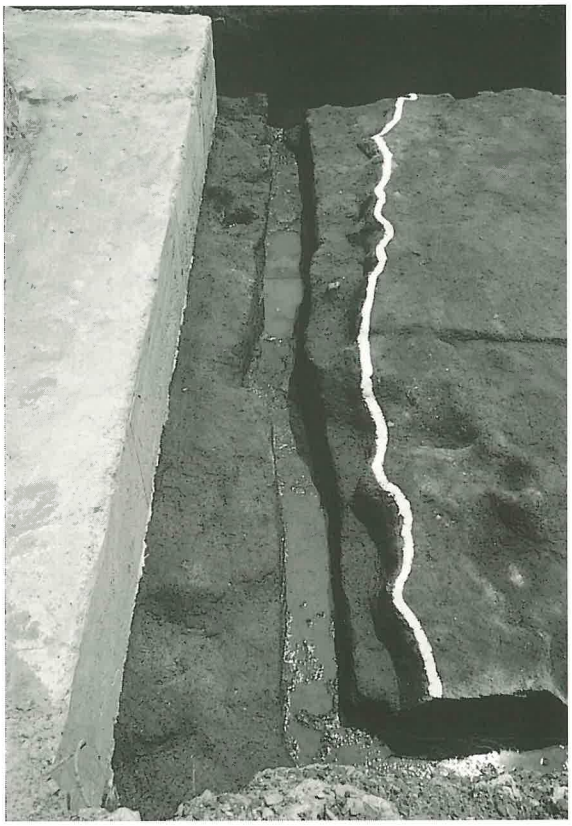


AⅡ区溝2完掘状態

図版　5　土毛地区

ＡⅡ区溝3完掘状態

B区溝状遺構及び遺物検出状態



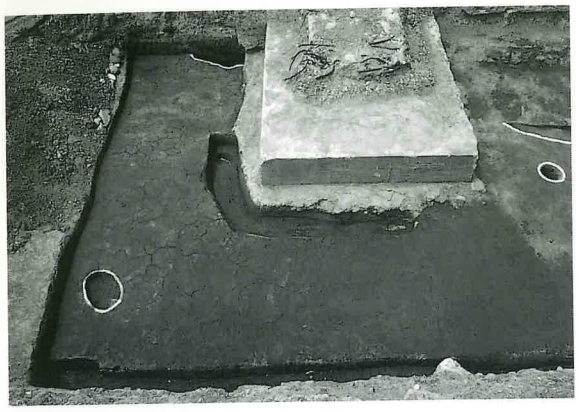
甲斐本A区溝1完掘状態

甲斐本A区溝2検出状態

甲斐本A区溝2遺物出土状態

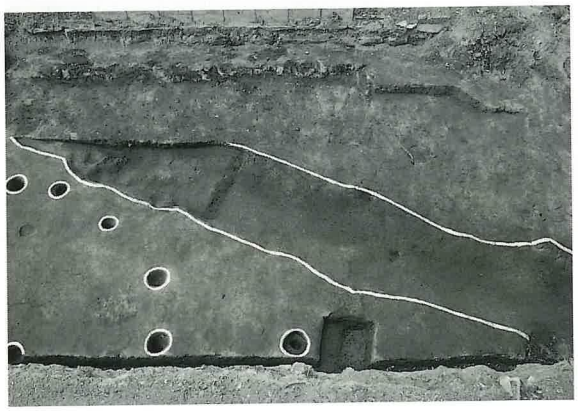
甲斐本A区子持勾玉出土状態

図版　7　甲斐本地区



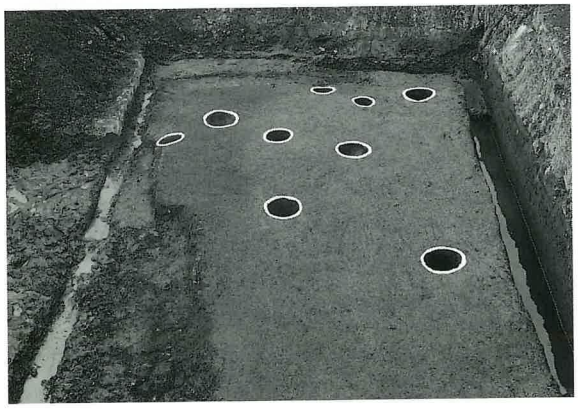
ＢＩ区南側完掘状態

B区2号土坑遺物出土状態



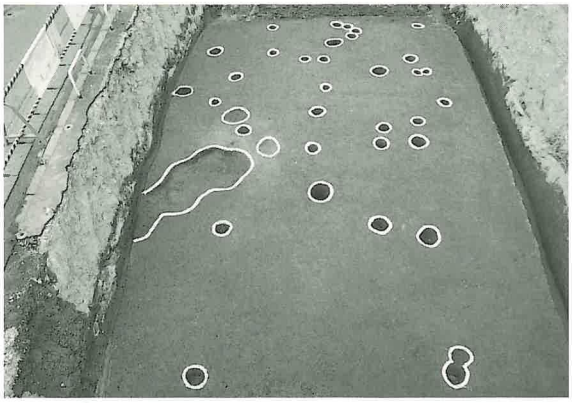
ＢＩ区北側完掘状態

B区溝2遺物出土状態



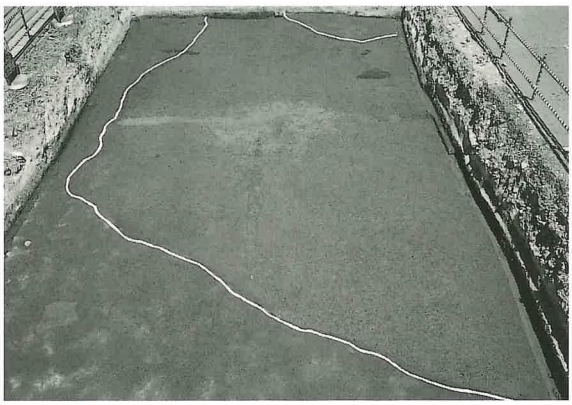
BII区完掘状態

BIII区完掘状態

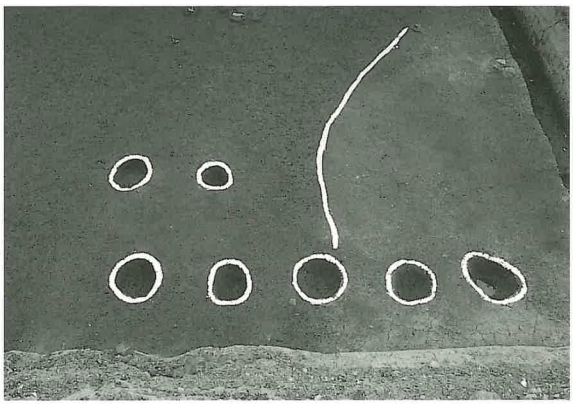


C区完掘状態

D区完掘状態

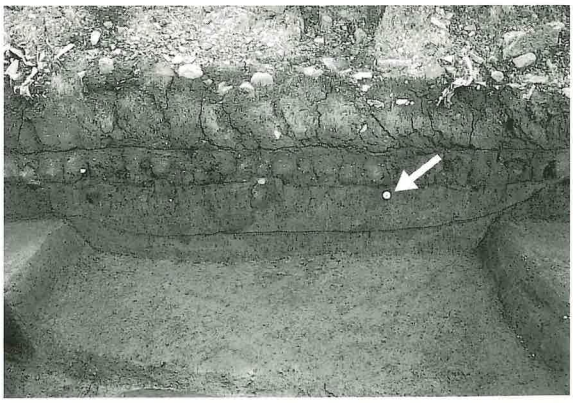


E区北側検出状態



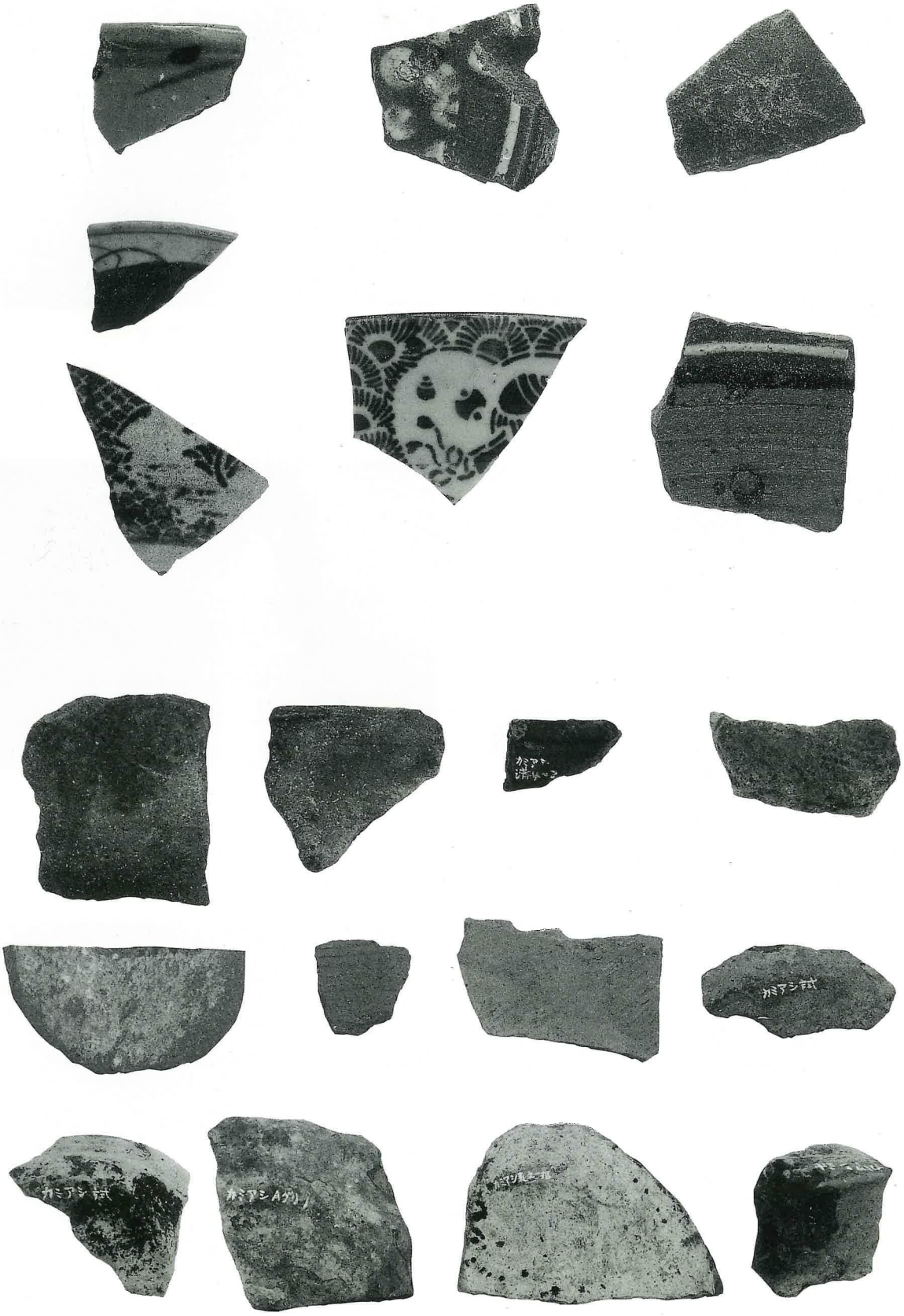
E区1号棚列完掘状態

E区溝1 完掘状態

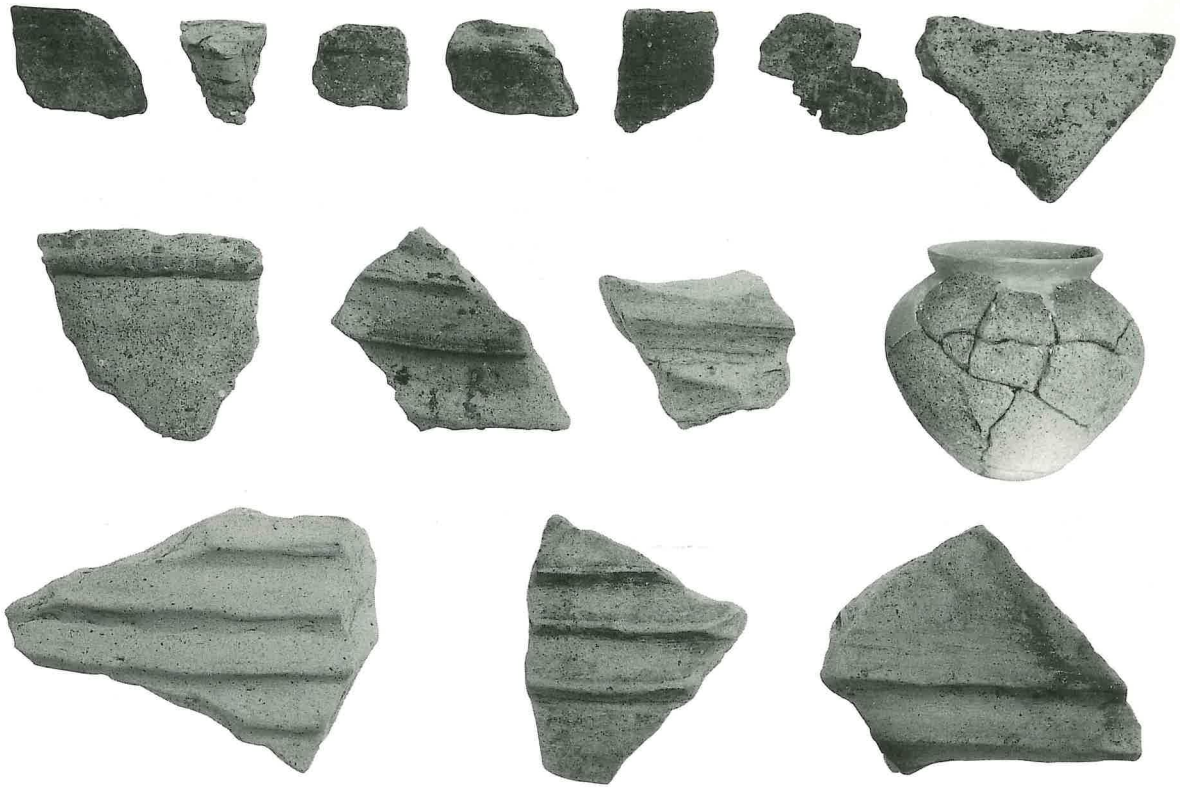


甲斐本F区溝1 土人形出土地点

図版　9　上芦原地区出土遺物



図版　10　土毛・甲斐本地区出土遺物



土毛地区出土遺物

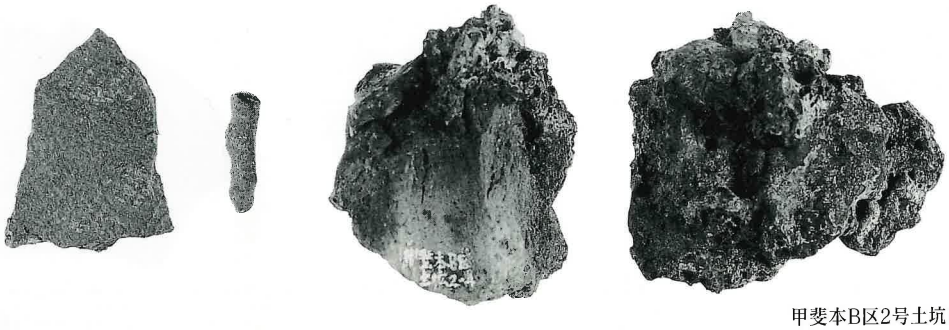
甲斐本地区出土遺物

図版　11　甲斐本地区出土遺物

甲斐本A区出土滑石製子持勾玉

甲斐本B区出土乳文鏡片

甲斐本F区溝1出土土人形



甲斐本B区2号土坑出土遺物

甲斐本地区出土遺物

フリガナ	フルゴウイセキグン　カミアシハラチク　ツチゲチク　カイモトチク
書名	古国府遺跡群　上芦原地区　土毛地区　甲斐本地区
副書名	国道210号羽屋工区道路改良工事に伴う発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第104集
編著者	村上久和　江田　豊　吉田博嗣　佐々木章
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021　大分県大分市府内町3-10-1
発行年月日	1999年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
古国府遺跡群（フルゴフイセキグン） 上芦原地区（カミアシハラチク） 土毛地区（ツチゲチク） 甲斐本地区（カイモトチク）	大分県大分市（オオイタケンオオイタシ） 大字羽屋字（オオアザハヤアザ） 上芦原（カミアシハラ） 土毛（ツチゲ） 甲斐本（カイモト）	442011	322070	33° 12′ 45″	131° 35′ 55″	平成7年6月 ～ 平成9年5月	2,700㎡	道路工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古国府遺跡群 上芦原地区 土毛地区 甲斐本地区	条里等	縄文後期 弥生時代終末 古墳時代 古代 中・近世	溝 掘立柱建物跡 土坑 旧河道 水田跡	縄文土器 弥生土器 子持勾玉 土人形 フイゴ片 鉄片 鉄滓 銅鏡片	1．大分川下流域の段丘では縄文後期～晩期に生活遺跡が認められるようになる。 2．弥生時代中期には水田水路・溝が認められる。 3．古墳時代後期には仿製乳文鏡や県内唯一の滑石製子持勾玉が出土した。なお周辺に鍛冶遺跡があった可能性が高い。また、溝より祭祀用土人形が出土した。

大分県文化財調査報告書第104集

古 国 府 遺 跡 群

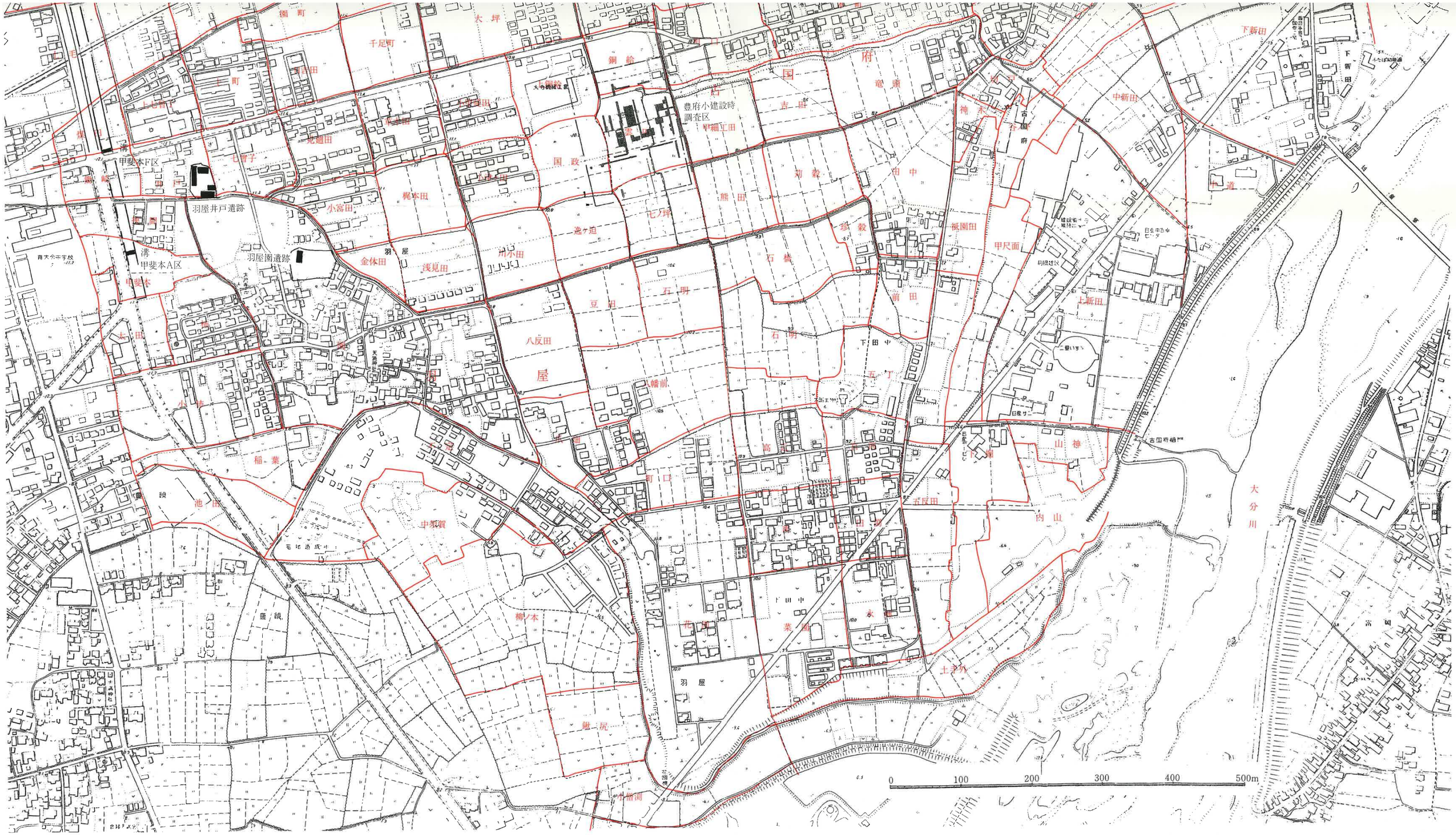
国道210号羽屋工区道路改良工事に伴う発掘調査報告書

上芦原地区　土毛地区　甲斐本地区

平成11年3月31日

編　集　大分県教育庁文化課
発　行　大分県教育委員会
〒870－0021
大分市府内町3－10－1
TEL 097－536－1111
印　刷　日新印刷株式会社

N
南大平寺
人道橋
上野丘二丁目
野添
町畑
荏工
胡荏
岩屋
古国府
掘田
河原
竜ノ鼻
下新田
中新田
上新田
中道
古国府橋
古国府
竜頭
吉田
神木
祇園田
甲尺面
田中
刈敷
熊田
珠数
石橋
前田
下田中
五丁
五反田
内山
山神
下畑
高神
大分川
横ノ本
牛踏
給
平生分
鴨田
甲頭田
六反田
芝原
八反田
牛踏
上牛踏
甲斐摺田
大坪
千足町
銅鈴
豊府小建設時
調査区
甲細工田
国政
梶本田
小窪田
七ノ坪
逸ヶ迫
小田
金体田
浅見田
豆田
五明
八反田
屋
八幡前
町口
稲葉
池田
中組
上芦原
下芦原
永興
溝
上芦原地区
溝
獅町
上町
上七曲
七曲
溝
甲斐本F区
羽屋井戸遺跡
羽屋園遺跡
溝
甲斐本A区
甲斐本
上田
山神
羽屋



付図　古国府条里字名及び条里内における発掘調査地点位置図（１／５０００）『市立豊府小学校建設地緊急発掘調査概報』大分市教育委員会 1974 より加筆転載